

## .1)はじめに

セミナー R.S.I.の 1975 年 2 月 11 の講義の末尾において、ラカン、フロイトの立場に身を置きつつ、つまりラカンのポロメオの輪(三つ輪のポロメオの輪)にもうひとつの輪を加えた四つ輪のフロイトの結び目をつくりながら、本当にこの輪が必要なのだろうかといった自問から始めて、かれ自身の〈父親〉-の-〈名〉を述懐しつつ、これをこの四番目の輪に託して、その命運を委ねる意思表示を聴講者に語っている。

今年は、次のような問いを立てることにします。すなわち想像的なもの、象徴的なものそして現実的なものを結ぶにあたって、もう一つのトラス、consistance による補足的な機能が、父親と言われている者の役割に関係してくるようなトラスによる補足的機能が本当に必要なかどうかといった問いを。この問題にはかなり以前から関わってきました。しかし当時はポロメオの輪で表すことができず、〈父親〉-の-〈名〉 Les Noms-du-Père といった表記で始めました。フロイトのテキストでは明らかなことですが、かれは象徴的なもの、想像的なものそして現実的なものを結びつけるのに〈父親〉-の-〈名〉les Noms-du-Père にのみに頼っているのですが、これを説明するのは実に様々なやり方があるものです。

この代補の輪は絶対不可欠なものなのでしょうか。絶対不可欠であろうからなのではなく、はっきり言えば、でっちあげられたものらしいので居座り続けているといったところなのです。確かなことは、嘗て、〈父親〉-の-〈名〉 les Noms-du-Père のセミナーを始めましたが、何人かの方たち、少なくとも当時聴講していらっしゃった方たちをご存知でしょうが、わたしは直ちにこのセミナーを中断したのです。フロイトにおいて突出している部分、〈父親〉-の-〈名〉les Noms-du-Pèreについて、これの分析の領野、**ディクタールディスクール**において占める代補 suppléance のアイデアを、わたしは数多くもっていました。ですから単数形の〈父親〉-の-〈名〉Le Nom-du-Pèreではなく複数形の〈父親〉-の-〈名〉Les Noms-du-Père を当時から採用していたのでした。

この代補なるものが絶対不可決のものではないからそれが行われぬ訳ではないのです。〈父親〉-の-〈名〉Le Nom-du-Père だけがすべてをまとめるよ

うにするために、われわれの想像的なもの、象徴的なものそして現実的なものは、われわれ各自にとって、多分、まだばらばらなのです。

ですがこうは考えないでいただきたいし、わたしはそういった性質(たち)ではありません、つまり預言者ではないのです。例えば、分析における〈父親〉の-〈名〉le Nom-du-Père あるいはそれ以外の場での〈父親〉の-〈名〉Le Nom-du-Père なしにして、われわれの象徴的なもの、想像的なものそして現実的なものも、みなさん方の好きなように、ばらばらのままで構わない、とは絶対しないように。

確かなことは、…これが進歩だとも言えないですが、ともかくも、(わたしのポロメオの輪には)余分な結び目はないでしょう。背中や首やその他身体各部からよきによきと結び目は生えていないでしょう。ひとつの結び目が虚飾を廃してすっきりとしているでしょう。最小限で済んでいるということだけで進歩があるとしてよいのではないのでしょうか。これは確かに想像的なものにおける進歩であり、つまりまとまり la consistance における進歩です。このままですと、皆さんはそれぞれ、皆さんの父親と同様まとまりがないまま、そのまとまりのない父親にぶら下がったまま居続けること必至です。

…今のままでは、例えば complexe d'Œdipe も complexe(複雑で)で、従来の分析家(vos pèresはそうとも読み取れる)の煩雑さから脱却できないのでは、と最後は釘をさしている(ラカン是他所で Œdipe はそれほど complexe ではないと言っている)のである。

四つ輪のポロメオの輪が最初に現れたのは1974年1月14日の講義においてである。

フロイトはこの(結び目の欠けた)3つ輪から4つ輪をつくったのですが、(このわたしの3つ輪の罨に)まんまと引っかかったのだと思います je lui suppose «peau de banane» sous le pied。どのようにしてかは見ての通りです。つまりかれは発明し、これを心的現実と呼びました。

そしてこの「心的現実」をエディプス・コンプレックスと言い換え、「この輪がなければ象徴的なもの、想像的なものそして現実的なもの【の輪】はばらばらになってしまう」と述べている。

1975年2月11日の講義の末尾に戻り若干のコメントを加えたい。

ポロメオの輪はもちろん三つ輪のものがオリジナルである。ラカンが四つ輪のポロメオの輪を「フロイトの輪」、三つ輪のポロメオの輪を「ラカンの輪」と呼ぶ。R.S.I.のセミナーにおいては、一種の「還元主義」が際立っている。réduit「還元された」といった表現が散見され、この還元がなにに還元されるかということ、現実的なもの le Réel に、である。例えば繰り返し発せられる表現である「意味の効果」effet de sens とは「意味」が外立する ex-siste ことにより、当の「意味」は消失し、「無意味」non sens あるいは「脱-意味」hors-sens となる理である。このことがラカン流の分析の解釈においても重要な手法となる(この点ではラカンは明らかにアンチ・フロイディアンである)。後述することとなるメタフォールの問題についても、l'erre de la métaphore(erre とは多義的であるが、R.S.I.の前年のセミナーのタイトルである Les non-dupes errent の動詞 errer の名詞形出あり、端的に言えば「推進力に頼らないで、惰性で運行する」ことであり、否応なしに多義性へと傾く象徴的なものに属す言語のもつマイナス面を糾弾する表現である)を排することが(分析の現場における技法としても)ひとつの課題となっている。還元とはこの点においては「メタフォールという象徴的なものの領野で生ずる意味の捨象」である。想像的なものの次元においては、ポロメオの輪は、多くの場合において「平面化」mis à plat によって示されるのだが、この「平面化」は人間の「愚かさ」débilité mentale に、ある意味において迎合しているのであり(このことを端的に示している用語が「まとまり」consistance である)、例えば「穴」trou、「三日月形」lunure(図 1.を参照のこと。「穴」は R.S.I.の円環のなかにそれぞれが認められ、「三日月形」は JA, JΦ, sens の部分を指す)は、平面化によらないポロメオの輪(例えば同じ2月11日に示されるアストラベを模したポロメオの輪において、ラカンは遠近感をもたせるために、より遠くの部分については点線で表示しているし、図 2.は射影によるものと看做すこともできる。ラカンは同セミナーにおいて Désargues の名を折に触れ引き合いに出している)においては表示できない場合もある。

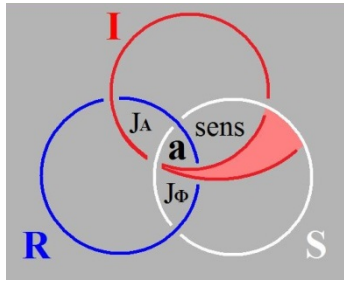


図 1.

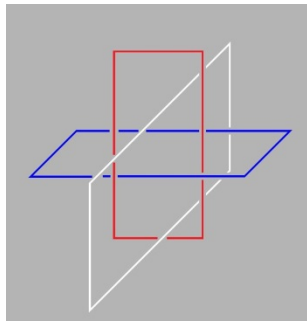


図 2.

還元 réduction(10/12/1974), についてはラカン自身のことばでは最小限度 le minimum という語が(17/12/1974)の冒頭に現れ、これに繋がっているものと解釈できる。ポロメオの輪は S,I が円環で示されているのに対して R は直線となっている。

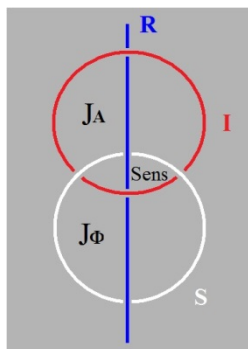


図 3.

かろうじて Sens, JΦ, JA は影を止めてはいるが、ラカンの意図としては、R(現実的なもの)の固有性としての外-立 ex-sistence により、「意味」だけでなく、他の図形、記号がもつ想像的なものに対して、さらには象徴的なもの(特にメタフォールについてはその erre【多義的であるが、差し当たって「惰性運行」と訳しておくことにする。詳しくは拙稿

[http://blog.livedoor.jp/ogimoto\\_blog/archives/cat\\_34323.html?p=2](http://blog.livedoor.jp/ogimoto_blog/archives/cat_34323.html?p=2) 参照のこと】)に関わる捨象したかったのであろう。

Jean-Claude Milner の *L'Œuvre claire*(Édition du Seuil, février 1995)においては、ポロメオの輪導入後のラカンを *le seconde classicisme* と称し、*littéralité* が支配する点において、*le premier classicisme* を継承するものであるが、後者においては、数学化 *mathématisation* が不徹底な部分を *mathème* (数学の演繹性を取り除いたものとミレール **ミルネール** は定義する)とし、この *mathème* を深化させた結果、編み出されたのがポロメオの輪のアイデアであるとする。前段で筆者が述べたことはこのミルネールの図式に符合するものであるとはいえるが、本書および、*La Force du minimalisme: un entretien avec Jean-Claude Milner*(例えば

<http://cahiers.kingston.ac.uk/interviews/milner.html> 参照のこと)のやや強引なラカン論についての筆者の批判については拙稿<sup>(1)</sup>はじめに

<http://www.ogimoto.com/pdf/20171011-02.pdf> 参照のこと。

四つ輪のポロメオの輪が最初に現れたのは 1974 年 1 月 14 の講義においてである。

フロイトはこの(結び目の欠けた)3 つ輪から 4 つ輪をつくったのですが、(このわたしの 3 つ輪の罨に)まんまと引っかかったのだと思います *je lui suppose «peau de banane» sous le pied*。どのようにしてかは見ての通りです。つまりかれは発明し、これを心的現実と呼びました。

そしてこの「心的現実」をエディプス・コンプレックスと言い換え、「この輪がなければ象徴的なもの、想像的なものそして現実的なもの【の輪】はばらばらになってしまう」と述べている。

1975 年 2 月 11 の講義の末尾に戻り若干のコメントを加えたい。

ポロメオの輪はもちろん三つ輪のものがオリジナルである。ラカンは四つ輪のポロメオの輪を「フロイトの輪」、三つ輪のポロメオの輪を「ラカンの輪」と呼ぶ。R.S.I.のセミナーにおいては、一種の「還元主義」が際立っている。réduit「還元された」といった表現

が散見され、この還元がなにに還元されるかという、現実的なもの *le Réel* に、である。例えば繰り返し発せられる表現である「意味の効果」*effet de sens* とは「意味」が外立する *ex-siste* ことにより、当の「意味」は消失し、「無意味」*non sens* あるいは「脱-意味」*hors-sens* となる理である。このことがラカン流の分析の解釈においても重要な手法となる(この点ではラカンは明らかにアンチ・フロイディアンである)。後述することとなるメタフォールの問題についても、*l'erre de la métaphore*(*erre* とは多義的であるが、R.S.I.の前年のセミナーのタイトルである *Les non-dupes errent* の動詞 *errer* の名詞形出あり、端的に言えば「推進力に頼らないで、惰性で運行する」ことであり、否応なしに多義性へと傾く象徴的なものに属す言語のもつマイナス面を糾弾する表現である)を排することが(分析の現場における技法としても)ひとつの課題となっている。還元とはこの点においては「メタフォールという象徴的なものの領野で生ずる意味の捨象」である。想像的なものの次元においては、ポロメオの輪は、多くの場合において「平面化」*mis à plat* によって示されるのだが、この「平面化」は人間の「愚かさ」*débilité mentale* に、ある意味において迎合しているのであり(このことを端的に示している用語が「まとまり」*consistance* である)、例えば「穴」*trou*、「三日月形」*lunure*(図 1.を参照のこと。「穴」はR.S.I.の円環のなかにそれぞれが認められ、「三日月形」は  $J_A$ ,  $J_\Phi$ , *sens* の部分を指す)は、平面化によらないポロメオの輪(例えば同じ2月11日に示されるアストラベを模したポロメオの輪において、ラカンは遠近感をもたせるために、より遠くの部分については点線で表示しているし、図 2.は射影によるものと看做すこともできる。ラカンは同セミナーにおいて *Désargues* の名を折に触れ引き合いに出している)においては表示できない場合もある。

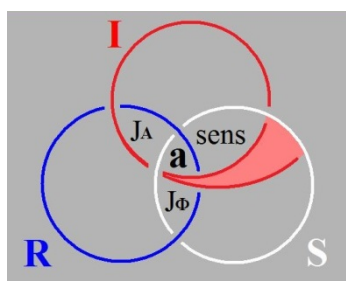


図 1.

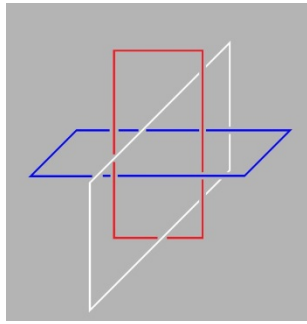


図 2.

還元 réduction(10/12/1974), についてはラカン自身のことばでは最小限度 le minimum という語が(17/12/1974)の冒頭に現れ、これに繋がっているものと解釈できる。ポロメオの輪は S,I が円環で示されているのに対して R は直線となっている。

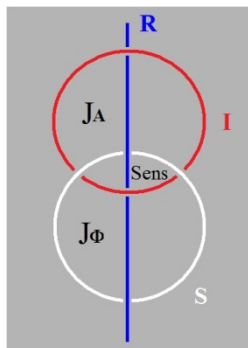


図 3.

かろうじて Sens, Jφ, JA は影を止めてはいるが、ラカンの意図としては、R(現実的なもの)の固有性としての外-立 ex-sistence により、「意味」だけでなく、他の図形、記号がもつ想像的なものに対して、さらには象徴的なもの(特にメタフォールについてはその erre【多義的であるが、差し当たって「惰性運行」と訳しておくことにする。詳しくは拙稿 [http://blog.livedoor.jp/ogimoto\\_blog/archives/cat\\_34323.html?p=2](http://blog.livedoor.jp/ogimoto_blog/archives/cat_34323.html?p=2) 参照のこと】)に関わる捨象したかったのであろう。

Jean-Claude Milner の L'Œuvre claire(Édition du Seuil, février 1995)においては、ポロメオの輪導入後のラカンを le seconde classicisme と称し、littéralité が支配する点において、le premier classicisme を継承するものであるが、後者においては、数学化 mathématisation が不徹底な部分を mathème (数学の演繹性を取り除いたものとミレー

ルは定義する)とし、この mathème を深化させた結果、編み出されたのがボロメオの輪のアイデアであるとする。前段で筆者が述べたことはこのミルネールの図式に符合するものであるとはいえるが、本書および、*La Force du minimalisme: un entretien avec Jean-Claude Milner*(例えば <http://cahiers.kingston.ac.uk/interviews/milner.html> 参照のこと)のやや強引なラカン論についての筆者の批判については拙稿 <http://www.ogimoto.com/pdf/20170808-02.pdf> 参照のこと。

還元 *réduction* に相反するものがラカンの言葉でいえば *extrapolation*(数学で用いられる「外挿」とはまったく関係がないものとみてよいであろう)であり、事実、ラカンはボロメオの輪を例えば次に示すように複雑に展開させている。さらに四つ目の輪を加えたボロメオの輪では「背中や首やその他身体各部からによきによきと結び目は生えて」いるわけであるので、もじどおり *extrapolation* となる。

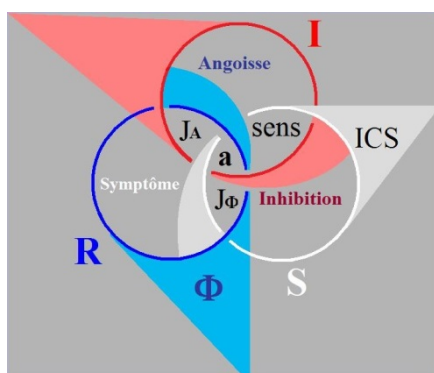


図 4.

このようにセミナー R.S.I.は *réduction* と *extrapolation* のあいだでラカンの地口を用いるならば Rimbateau(*La Troisième* 参照のこと。ランボアの「酔いどれ船」*Le bateau ivre*のごとく謂わば、千鳥足で蛇行しているのである)そのものである。冒頭に引用したラカンの言葉からすると、*réduction* は *progrès* であり、フロイトから(クラシカルなラカンを経て)後期ラカンへと向かう進歩なのであろうが、これを進歩とも呼べないと屈折した心境を映す言い回しである。いずれにしてもわれわれは、この *extrapolation* の部分について分析的ディスコースによって解釈しなくてはならない。この言葉が里程標として示されているものと仮定してである。

## 2)メタフォール批判



1974年12月17日の講義におけるminimumとはなにに向けられたminimumなのか。このminimumの対極として示されるのが「メタフォールの隔たりの最大限」*un maximum de l' écart de la métaphore*である。

(想像的なものが「形相的」という意味での実体 *substance* を想定していることについての批判に続き、ポロメオの輪が、想像的なものの特性である「まとまり」*consistance* とは別に、現実的なものにも三つの輪は純粹なまとまりとして結びついていることを踏まえ、批判は)メタフォールについてもまったく同様に言えます。このことは、昨年度のセミナーで意図した意味においてですが、「惰性運行」とはなににかという問題が立てられるのですが、これはメタフォールにおける「惰性運行」とはなににかという問題です。というのもわたしがお話しすること、それは象徴的なもの、話し言葉についてのみ言えることだからですが、わたしの話かにおいて、ポロメオの三つの輪かにまとまりがあることが現実的なものに根ざしているとするのは、こういう訳があつてのことです。つまり、「意味の隔たり」*l' écart de sens* という表現を用いますが、これが RIS 間、個々に三つある輪のあいだで、それぞれ固有なものとして当てはまるのです。「意味の隔たり」とは 最大限として一定の限定を想定されるものです。「意味の隔たり」に許される最大限とはなんでしょうか。これが、いま現在わたしが、かの言語学者(ヤコブソンのことである。象徴的なものが優位であった時期のラカン自身への自己批判により、この批判の矛先は必然的に自身の恩師にも向けられてしかるべきであろうが、実際はラカンは、かれに対する批判は展開してはいない)に対してただただ問うてみたい質問なのです。

ラカンは明言していないが、フロイトの分析治療、解釈そして理論全般に通底しているものとは言語による分析であり、メタフォールの駆使である。象徴界を優位なものとしていた時期のラカンも同様であり、両者は共犯関係にあつたといってもよいであろう。ポロメオの輪をラカンはエクリチュールであると定義している。パロールがメタフォールの意味を含むのに対して、エクリチュールは意味が捨象されている分、*réduction* が施されているものと解してよからう。*effet de fascination*,さらには*jaculation*といったもの(1975年2月11日の講義)は、パロールにおいてメタフォールが削ぎ落とされた効果*effet*である。奇妙なことであるが、ラカンは効果*effet*という表現を用いるとき、通常の意味における

効果という意味においては「効果の出ない効果」であることが多い「意味の効果」effet de sens然りである。effet de sensとは「無-意味」non-sensないしhors-sensのことであり、sensの「外-立」ex-sistenceの効果なのである。

メタフォールの(自己)批判は、同時にle Nom-du-Père、シニフィアンとしてのファロスといった象徴的なものが優位であった時期の教えの全面的撤回となる。

ところでメタフォールというものは、どのようなものであったのか。以下はErik PorgeのL'erre de la métaphore(essaim 21, Éditions érès, 2008, pp.17-44.)を紹介するために認めた拙稿(<http://www.ogimoto.com/pdf/20171002-01.pdf>)に修訂を施したものである。

『主体のメタフォール』と題された論文は『無意識における文字の執拗さ(instance は従来「審級」と訳されてきたが、この instance も他の多くの用例と同様、insistance の意である：筆者)の補遺として書かれたもので、『精神病のあらゆる可能な治療に対する前提的な問題について』と同時期のもの(1957年)であり、ここでのメタフォールの式：

$$\frac{S}{S'_1} \cdot \frac{S'_2}{x} \rightarrow S \left( \frac{I}{s''} \right)$$

も『精神病…』での式：

$$\frac{\text{Nom-du-Père}}{\text{Désir de la Mère}} \cdot \frac{\text{Désir de la Mère}}{\text{signifié au sujet}} \rightarrow \text{Nom-du-Père} \left( \frac{A}{\text{phallus}} \right)$$

を踏まえて読む必要がある。Porgeは『主体…』からの引用に自らの説明をさし挟んでいる。メタフォールは「意味作用の効果であり、この意味作用の効果とは詩とか創作とかの類のものであり」、「連鎖をなしたシニフィアンのあるものから他のものへの置き換わりであり、この支え phore の機能は一切自然のものに定めては従ってはいない」。S'が相殺されることがメタフォールの成功の条件なのであるが、プレルマンも強調するように、「メタフォールは、言うならば、四項からなり、四つとも異質なものののだが、分割線によって三対一となり、これはシニフィエに対するシニフィアンの異質性への分割となる」

(Écrits, p. 890)。置き換わりは連鎖のなかに余り un reste を残し、これが迂り、脱落する。メタフォールはメトニミーを伴う。《famillionnaire》の機知は、ラカンも指摘しているように、詩的想像とメトニミー的廃棄物からなるが、後者は抑圧され、それでいて光り輝くもの、といった二つの顔になる (Les formations de l'inconscient, Le Seuil, 1998, p.44)。〈父親〉の〈名〉le Nom-du-Père のメタフォールは象徴的なものが現実的なものと想像的なものに対して優位であった時期のラカンの教えである。父親のメタフォールの式はメタフォール(象徴的な作用の端的な例)と le Nom-du-Père とのあいだの特権的な絆を築くものであった。ヴィクトル・ユーゴーの『眠れるボアズ』の「かれの束の穂は惜しみもなく恨み深くもなく」の行における「束の穂」というシニフィアンにおいては、ファロスを含意する生殖力といった観念が Booz(これも zob の回文と看做される)に置き換わっている。先の三対一がメタフォールの論理を成り立たせていることから、メタフォールは単なる置き換わりに還元されるものではなく、つまり単なる比較ではなく同一性を生じさせるものなのである。ユーゴーの詩は、来たるべき父性をメタフォール化し、Booz にとっては遅れてやってくるもの(Booz が「排除された」もののように見えるとラカンは言う)であり、さらに父性のメタフォールをメタフォールとしての父性へと結びつける。メタフォールは新たな意味を生じさせるものとしてそうなのである。この結びつきから、ファロスのシニフィアンは〈父親-の名〉le Nom-du-Père に付随するものとなる。メタフォール的な機能を獲得するに至った父親のシニフィアンはファロスが持つ性的な意味作用をも増補的に兼ね備えることとなる。逆から言えば、ファロスは象徴的な意味作用 signification を獲得するに至り、さらには意味 signification(Bedeutung)そのものになる。

#### 4. le Nom-du-Père と les Noms-du-Père

1963年11月20日に、たった一回だけ行われたセミナー Les Noms du Père(複数形、d ティレなし)は、Espaces Lacan の解説によると、当初は Le nom du Père と単数形、ティレなしのタイトルをラカンは用意していたようである。いつの時点でこれが複数形とて定着したのかは筆者は知らない。複数形の論拠としては、神に関する呼称が複数示されている(Elohim, ChadanあるいはEl Chadan)ことを除いて、明確なものは見当たらない。出エジプト記の「燃える柴」における神の声とされる ehie asher ehie についてのアイグスティヌスの影響化での解釈が今でも残っている、フランス語で示すなら、Je suis ce que je suis(日本語では「われは在るとこのものもである」との訳となる)に対する、七十人訳聖書についてのラカンの評価からヘブライズムに対するヘレニズムの影響、父の名におけるトーテムの問題など、もしこのセミナーが続けられたら、「四概念」とはまったく

違った展開を期待できたであろう。

R.S.I.の前年の Les non-dupes errent と Les Noms-du-Père と同音の地口によるタイトルのセミネールにおいても複数の父親の名については、まったく説明のない仄めかしを除いて、言及はない。但し、1974年3月19日のセミネールにおいて提出される nommer à の問題は R.S.I.の最後の講義(1975年5月13日)に登場する「想像的名指し」 nomination imaginaire に関係してくるのであるが、これは後述する。

図3に立ち戻ると、現実界の輪が開かれ、一本の、無限に延びた直線へと展開されているのが示されている。この図と図4(無限の直線の代わりに 明るい青色の帯が輪、つまり consistence から外に拡がっている)との関連を読み取ることが重要である。「開いて無限の直線に展開する」ことの意味は現実界の様相論理である不可能性、「書かれないことを止めない」 ne cesse pas de ne pas s' écrire を示している。現実界そのものは無意味であり、無意味とはどこまで展開したところで意味が生じない、という様相である。

Daniel Loescher によれば(La jouissance au fil de l' enseignement de Lacan, érès, p.442)、ex-sistence は exception, exclusion をも意味するものであり、sexuation の式では  $\exists x \rightarrow \Phi x$ 、原父の式に相当する、としている。ここからはいろいろな論議の展開が可能であろう。たとえばファロスのジュイッサンスからは〈他者〉のジュイッサンスへは到達「不可能性」が記されている、つまりファロスの法の否定は原父の「去勢をまぬかれている」とする特権、これはファロスによって規定される象徴界という閉域からみればジュイッサンスなのであるが、そもそもジュイッサンスは現実界に属し、じじつ、女性の側からの pas toute によって、その効力は無に帰すこととなる。Loescher はこうも言っている。現実界は「意味」を expulsé されたもの、とするラカン(この年のセミネール、1975年3月11日の講義)に従うのならば、ファロスのジュイッサンスは「意味」において ex-siste する、であるからファロスのジュイッサンスは「意味」とは関係を持ち得ない、と。

ラカン自身の言葉でも以上のことは整合性を持つことがわかる。

すぐ目につくことですが、エクリチールはそれ自体平面化へと向かわせるものがあります。そしてわたしが示唆すること、言い換えるとなにかが想定して

いる、というより具現化している、たとえば象徴界は二次元空間でこう示していますが、つまりなにかが *ex-siste* すると、それは、エクリチュールにおいて想定されるのは、輪を無限に延びた直線に展開することによってしかなされないことからです(17/12>1974)。

そして図 4 については、

ここに  $J\phi$  としてファロスの享樂を位置付けることにします。現実界が *ex-siste* するものとしてであり、現実界の輪、現実界についての含意が施されているのでそう呼ぶのですが、これを展開すれば無限の直線になり、まとまり *consistance* から言うならば切り離されます。穴をなすものとしての現実界において享樂は *ex-siste* するのです。このことは精神分析的経験がもたらす事実なのです。

となる。ポロメオの輪は(特に平面化したもので見せられと)、これはどうしてもまとまり *consistance* を兼ね備えたものとして想像的に捉えるしかない。しかし *ex-sistence* により、*ex-sistent* するもの(*le sens*,  $J\phi$ ,  $J(A)$ ) は、現実的なものにおいて *ex-sistent* することとなり、そこではすべてが「意味」を失う。さらにフロイト批判として

フロイトは、いちいちその証左をここで挙げ連ねることはしませんが、ファロスの享樂を前にして、平伏したのです。フロイトの精神分析的経験が発見したもの、それはこのファロスというもののジュイッサンスに解き難い結び目の機能 *la fonction nodale* を与えてしまったことです。ファロスの享樂をめぐって、この現実界がどうなっているのか、これを基礎付けるのが分析の仕事です。

*nodal(e)*とは結び目 *nœud* の形容詞であるが、これは解かれることに抵抗したもの、と解される。結び目を解くには輪を切って線として(実際ラカンはそのようにしている)、開くことである。但しこの線が直線で無限のものとするのは擬似的にポロメオの輪の結び目性 *nodalité* を保ったままにしておく戦略なのであろう。じっさい輪がばらばらになれば *ex-sister* した 三日月形は消失してしまう。意味を失うとはこの消失を指してラカンは言っているのであろう。

ともあれラカンは、自身のポロメオの輪(三つ輪)ではなくフロイトの輪である四つ輪のポロメオの輪について話を展開してゆく。既に述べたように、四つ輪のポロメオの輪が登場する 1975 年 1 月 14 日に、この四つ目の輪に与えられた「心的現実」、「エディプス・コンプレックス」といった表現を、本稿の冒頭に掲げた 1975 年 2 月 11 日の当日の講義の末尾から少し遡った講義の途中で、一旦「宗教的現実」la réalité religieuse に置き換えて、「こうしてこの機能、この夢のような機能により、フロイトは象徴的なもの、想像的なものそして現実的なものを結ぼうと思いを馳せ始めたのです」と述べている。

1975 年 3 月 11 日の講義でラカンは、仕切り直しするかのように次のように述べる。

…R.S.I.、今年はタイトルとしてそう書きました。R.S.I.はどれも文字で、文字そのものです。これらは等価性が前提となっています。これらをイニシャルとして、もしアール、エス、イーと言うとどうなるのでしょうか。あるいはレエール、サンボリック、イマジネールと言うと意味が生じます。そしてこの意味についての問題が、相も変わらず、今年の課題なのです。そこに意味が生じますが、意味に固有なものとは、そこで何某かを名付け *nomme*、「もの」*les choses* という漠然としたものにディーマンション注)を生じせしめ、この「もの」は三つの領野のひとつである現実的なものにのみ根ざしており、ここから意味の現出と呼ぶことができる何某かなのです。

ここで新たに「名付ける」*nommer* という今までとは異なった次元が加わる。

注)拙稿 *Sexuation* の式 - *Le savoir du psychanalyste* の 1972 年 6 月 1 日のアントウルティアンを中心に - *I.R.S.*, 9/10, pp.298-331 参照のこと(但し、本セミナーに基づけば、エクス - シスタンスを通じて 意味が無 - 意味になる点がこの稿では欠けている)。Vincent Clavurier によると *mansion* は「住み家」の語意との関連でハイデッガーの「人間は言語の住み家」と関連している点での記述もあるが、英語 *mansion* はフランス語 *manoir* に関連していることが述べられている。*Manoir* は *mano-art* とも表記でき、ポロメオの輪の手芸によって表わされる、デカルト的空間とは違ったトポロジー的空間の 3 次元での話 *dit* の効果を踏まえているとされる(«*Réel, symbolique, imaginaire : du repère au nœud*», Vincent Clavurier, *ESSAIM*, 2010/2, No25, pp.83-96)。nommer を「名付ける」と訳したが、ラカンは *nommer* と言ったり *donner un nom* と言っている箇所もあるが、これらは同一の意味をもつ

ものと判じられる。la nomination は「名指し」と訳したが、nommer およびその名詞化 le nommer と la nomination は区別すべきと Liliana Cazenave(“Nomination” par Liliana Cazenave, in Schilicet 2012, 本稿は現在 URL 上で読むことはできない)は述べているが、必ずしもそうとも思えない。その訳は、この3月11日のラカンの問題となる発言にある。

この行に至るまでのラカンの言葉を少し遡って追って行くことにする。

まず nommer についてこう説明がある。

「それらを名付けて」《Les nomme》とわたしは言いました。わたしがしたことはまだ証明には至っていないのです。ポロメオの輪「示すこと」monstration もそれほどできていないのと似たり寄ったりで証明もまだまだです。この結び目で「示すこと」ができているものについては証明することを試みてきました。証明とは分析的ディスクールに仕立てることです。「示すこと」も証明も骨が折れます。

Monstration は「現実的に」結び目を作ったり、解いたりすることで、それを披露することであるが、Les non-dupes errent では monstration さえできれば良いと言っていたが、本セミナーでは専らポロメオの輪に執心していて、その上現実的なものを優位においているので、この行はやや奇異に聞こえるが、後に象徴的なものの一部と現実的なものの結びつきが重要であることが明かされるので、ここでは démonstration とは現実的なものについて象徴的なものの領野で行うこととのみ理解しておく。

ついでラカンはフロイトにおける父親とはなにかといった問題に踏み込む。ラカン曰く、フロイトにとって父親は le Nom-du-Père でしかないと言う。『トーテムとタブー』での現父は残忍で暴君的イメージで捉えられているが、息子たちに殺害された後は法を具現する象徴的父親となる。ラカンからすれば、フロイトは想像的父親も現実的父親も象徴的父親が中軸にあり、想像的父親に関して言えばそれは生前の父親であり、あるいは原-父であり、それが想像的であることが理解できず、死が分水嶺となっていて、体内化による同一化等複雑な complexe 機制による説明が加わり象徴的父親へと結びつく。「原」Ur は神話的であり事後的に過去に想定されるものになっている。原-光景、原-抑圧しかりである。例えば原-抑圧についてのラプランシュとポンタリスの『精神分析用語辞典』の記述を見てみよう。「原抑圧は無意識の初期形成物の起源をなしてはいるが、その規制は無意識の側か

らの備給によっては説明されえない。それはまた前意識-意識系からの備給の撤収により生じるのではなく、専ら逆備給から生じる。【原抑圧における持続的な消費をあらわしているのは逆備給であるが、それはまた原抑圧の持続性を保証している。逆備給は原抑圧の唯一の規制である。本来の抑圧(事後の抑圧)にはそれに前意識備給の撤収がつけ加わる】〔Freud (S). 『無意識について』1915. G.W., X, 280 ; S.E., XIV, 181 ; 仏, 120 ; 著作集, VI, 98 ; 選集, IV, 212-3. (『精神分析辞典, ラプランシュ/ポンタリス, 村上仁監訳, みすず書房, 1977』. フロイトは Ur が付く術語に関して、時間軸における前後関係と論理的前後関係とのあいだで混同、勘違に気づいていないか、意識的論点先取があるかどちらかである。ラカンがしばしば口にする「前提とは想像的な領野の産物である」という定式はここにおいても符合している。『否定』についての論文を父親に当てはめるならば、フロイトにおける父親は存在判断と帰属判断とのあいだでの混同、混乱がある。エディプス・コンプレックスというからにはコンプレックスは複合であるのであるが、フロイトにおける父親はほぼラカンの le Nom-du-Père (単数系)という表現で置き換えることができる。もちろんフロイトの著作を読んでいると、der Vater 以外に ein Vater, mein Vater(フロイト自身の父親であったり、分析主体が語った言葉が直接話法で示されているかれ/かの女の父親)その他、dein Vater, Ihr Vater, sein Vater, ihr Vater, unser Vater, euer Vater, Ihr Vater, unsere Väter, eure Väter, Ihre Väter 等々の語に遭遇するが、かれ等は le père symbolique の現身として、あるいはそれが含意的なものであったり、そうでなくともリファレンスとして示されている。因みにフロイトにおける現実の父親は、隠蔽記憶によってアクセントがずらされていることだけが示され、フロイト自身の現実の父親についての分析はほとんどなされていないと言ってよい。

十歳か十二歳かの少年だった頃、父はわたしを散歩に連れて行って、道すがらわたしに向かってかれの人生観をぼつぼつ語り聞かせた。かれはある時、昔はどんなに世のなかに住みにくかったかということの一例を話した。「己の青年時代のことだが、いい着物をきて、新しい毛皮の帽子をかぶって土曜日に町を散歩していたのだ。するとキリスト教徒がひとり向こうからやってきて、いきなり己のぼうしをぬかるみのなかへ in dem Kot 叩き落とした。そしてこういうのだ、『ユダヤ人、歩道を歩くな』」「お父さんはそれでどうしたの？」すると父は平然と答えた、「己か。己は車道に降りて、帽子を拾ったさ」これはどうも少年のてをひいて歩いて行くこの頑丈なちちおやにふさわしくなかった(フロイト著作集2『夢判断』165 ページ、高橋義孝訳、人文書院【Sigm. Freud, 《Traumdeutung》, Gesammelte Werke II/III, pp.202-203, S. Fischer Verlag】)。



In dem Kot はフロイトの各国語の翻訳において邦訳と同じような隠喩で訳されてるが、筆者には、まず直訳が浮かぶ。しかしこれは時代考証、当時のフライベルグの街について、道路事情、下水事情、渠についての考証が必要であろう。「舗道」は「歩道」と書き換えた。

フロイトの分析は、ハンニバルとハスドルバルの例についても、その行き着く先は、エディプス・コンプレックスに基づく超自我、自我理想への想致でしかない。『日常生活の精神病理学』、X、「思い違い」(フロイト著作集 4、187-188 ページ、懸田克躬訳、人文書院【Sigm. Freud, 《Zur Psychopathologie des Alltagslebens》, X. “Irrtümer”, Gesammelte WerkeIV, pp.243-245】)においてもこれが繰り返される。かれには「現実の父親」が見えていない。「ハンス少年」の症例においても同様である。いくつかのフロイト分析の結果は、反動形成の強化でしかない。

ラカンにとって un père はまさしく現実の父親注である。現実的なものがより重視されるようになり<父親> (-)の(-)<名>注のうち le Nom-du-Père と表記されているものについて、次第に(自己)批判色が強まる。

1975年1月21日の講義においてラカンは現実の父親/ある父親について「父親 un père は愛が認められる場合にのみ尊敬も認められる」、としながらこう付け加える。「愛と言われているもの」そして「尊敬と言われているもの」について、「皆さんは耳を疑うでしょうが」と断った上で、「père-version 的にに向けられ père-version orienté」となる。更に、「父親は母親を欲望の原因となる対象(a)として」となり、これが愛と言えるかどうかである。対象はすべて部分対象である。女体の部分、あるいは女体全体であってもそれを部分として欲望が働くのであれば、これは性的欲望に他ならないし、部分対象への欲望ということであれば、これはフェティッシュ的欲望となる。… ou pire での愛の定式「僕が君に与えるものを拒んで欲しい、なぜならばそれはそうではないのだから」Je te demande de me refuser ce que je t'offre, à ce que ça n'est pas ça であるとする。現実の父親の妻(母親)に対する欲望とはこの定式には当てはまらず、この欲望を愛であるとする主張はかれの妻からの承認が不可欠である。ラカンはこの行に続いて、子どもたちに対しても、例外的にうまくいっているケースでも、せいぜい、禁圧を加えながら、現実に介入し(つまり子どもたちの世話をし)、半分神さま mi Dieu のような存在を保つこともできる、と述べている。父親の機能 fonction にとって père-version はその唯一の保証となってしまうし、こ

れも症状の関数 fonction であることが示される。

症状についての外延は後期、晩年のラカンにおいて大幅な拡がりを見る。究極的には一般化したボロメオの輪 nœud borroméen généralisé とともに一般化した症状 symptôme généralisé が理論付けられるのであるが、この問題は本稿の枠には収まらないので、ここでは後述することとなるファロスのジュイッサンスと〈他者〉のジュイッサンス jouissance de l'Autre(この de は目的格的属格の意味で使われている。つまり〈他者〉【の身体】を jouir することである)の関係について、手短かに述べることにする。

第一に、ファロスには欠陥があり、〈他者〉の身体を jouir する能力など持ち合わせていない(「性的関係はない」ことの元凶である)。それゆえ〈他者〉のジュイッサンスは不可能なのである。であるから女性 une femme はすべての男性にとって症状となる(一方で、le Sinthome、1976年2月17日の講義において、このことと相関するような行が現れる。

… 性的等価性 équivalence 注1)がないところに sinthome があるのです、つまり関係が生ずるのです… 無-関係は等価性に属するものです。等価性がない限りにおいて関係は構成されるのです。つまり性的関係と関係がないものと並存するのです。ただし、関係がある場合、sinthome がある限りにおいて、つまり既に述べたことですが、sinthome から他の性が支えられるのです… le sinthome とはまさにわたしが属していない性、女性 une femme なのです。女性 une femme がすべての男性にとって un sinthome であるのは、至極当然のことですが、他の名を、男性としては女性 une femme に見いだす必要があるからです。le sinthome が非-等価性によって特徴付けられているのですから。こう言えましょう。男性 l'homme は女性 une femme にとって、あらゆる意味において、un sinthome よりひどい責め苦となっており、こう言ってもいいでしょう、災禍 un ravage 注2)となっているのです。

注1) 等価性については拙稿 <http://www.ogimoto.com/pdf/20171011-02.pdf> を参照のこと

注2) フランス語 ravage は ravir と同根であり、ravir は俗ラテン語 rapire に由来する。英語では rape となり「サビニの女たちの略奪」を英語では The rape of the Sabine Women と表記される。rape はこの場合「強姦」の意味をもたない。フランス語では通常 Enlèvement des Sabines と呼ばれる。ravir からは当然 ravisement が派生してくる。ravisement の語

意は enlèvement と同義であるが、神秘思想において、この語は一種の脱-自 extase であるとされ、魂は神によって捕らえられることであり、神は力づくで魂を奪うのであり、extase を経験する者はこれに抵抗することすらできない。この後者の意味が和らげられ、現在用いられる ravissement の語義となるのだが、略奪、誘拐といった語義も含意していることを念頭にマルグリッド・デュラスの『ロル・V・スターンの歓喜』は読まれるべきであろう。ラカンに即して言えば、ravage はやはり ravissement をも含意して捉えるべきで、心的に強力な作用を及ぼす、母親-娘の関係(フロイト的図式でいえば、娘は母親に対して、ペニスをつけて自分を産んでくれなかったことへのルサンチマンの強さから、しばしばフランス語圏ではこの心的強度を ravage にて表す。ラカンにおいてはしばしば、女性の側からの ravage は究極のケースでは恋愛妄想 érotomanie に結びつく。恋愛妄想のケースでは「名-無し」Sans-Nom(v. les Écrits, p.826)は自らに名を与える se faire un nom、それも例外的女性 La femme として名をなしていることが妄想の中核にある。

1963年11月20日の Les Noms du Père が、その当時において、後期ラカンに対してどれほどの射程をもっていたかは計り知れないが、ボロメオの輪を導入してから、この〈名〉を複数形にしたことについて、かれは、先見の明があったとして、誇らしげに語る。セミナー R.S.I.(1975年3月11日)において、Les Noms-du-Père(複数、ティレ付き)注)についてはラカンは、それは象徴的なもの、想像的なものそして現実的なものであり、辿々しく語る。筆者が問題となる発言としている箇所である。

Les Noms-du-Père、つまり最初の名(Noms)で、言わしていただくと、先程「意味」という語に込めた重みからすると、この Les Noms-du-Père が最初の名で何某かを名付けるものとして、〈父〉が、神が名付けるのですが、動物それぞれに、名をです。聖書にそう書かれています。驚くべき存在で聖書には〈父〉と呼ばれる存在です。人間の想像の第一歩では〈父〉とは神のことです。神が、どうでもいいものではなく動物それぞれに名を与えるために駆り出されるのです。

筆者は再度確認したが、日本語訳でもフランス語訳でも英語訳でも、動物に名を与えた者は後にアダムと呼ばれる人間になっている。

יֵט וַיֵּצֵר יְהוָה אֱלֹהִים מִן הָאֲדָמָה, כָּל חַיֵּי הַשָּׂדֶה וְאֵת כָּל עוֹף  
הַשָּׁמַיִם, וַיָּבֵא אֶל הָאָדָם, לְרֹאוֹת מֶה יִקְרָא לוֹ; וְכָל אֲשֶׁר יִקְרָא לוֹ  
הָאָדָם נִפְשׁ חַיָּה, הוּא שְׁמוֹ.

2-19. L'Éternel-Dieu avait formé de matière terrestre tous les animaux des champs et tous les oiseaux du ciel. Il les amena devant l'homme pour qu'il avisât à les nommer; et telle chaque espèce animée serait nommée par l'homme, tel serait son nom.

2-19. そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。20 それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。

単なるラカンのラプシュスなのであろうか、ことさら辿々しく語っていることからなにか底意があったのか。ラカニアンの中なかでもこの点に言及しているものは皆無である。ラカン自身としてば、1975年10月4日のジュネーヴ講演において、O. フルールヌワの精神病における排除 forclusion についての質問に対して

〈父親〉-の-〈名〉の排除 forclusion。それは別の次元の問題です。〈父親〉-の-〈名〉だけが問題なのではなく、〈名〉-の-〈父親〉も含意しているのです。つまり名付ける父親です。このことは創世記にはっきり描かれています。猿まねよろしく、神はアダムに動物たちに名を与えるように告げます。二段階あるようにことは進展していくのです。神は動物たちの名について知を想定しているものです。なにせかれが動物たちを創造したのですから。ですから神は人間を試したことになります。人間は猿まねができることを見抜いていたのです。この点について、ジョイスの中なかで-Jacques Auber はわたしの心中を察してくれていると思いますよ。男の方は、鷺鳥のことをガチョと発音することになったのです。男性は情けないものに位置付けられるのです。わたしは多くの人々がショックを受けることをよく口にする性質(たち)でしょうが、言語を発明したのはむしろ女性ではないかと。創世記にそのことを読み取れます。蛇にかの女たちは話しかけます。つまりファロスにです。かの女たちはファロスが自分

たちにとってヘテロだからその分話しかけるのです。

わたしの夢虚言かもしれませんが、ともかくこう問うことができるでしょう。ひとりの女性がいかにしてそれを発明したか。かの女はそれに関心があったからと言えましょう。常識に反して、ファロス中心主義は女性 *la femme* の最良の保証です。それ以外なにもありませんから。聖母マリアは蛇の頭を踏みつけています。つまり蛇に支えられているのです。どの画家によるものもステレオタイプなのです。そんな軽口叩いて、と仰るかもしれませんが、ジョイスも同様な馬鹿げたことを連想させることを書いていますから。

ジョイスはかれ独特の筆致で女性たちとの関係を描いています。かれは、人間に特技があるとしたら、そえはただひとつ、先人たちが言えなかったことを言うことができる点であることを示そうとしました。だとしても結局、それも繰り返す。それは症状です。わたしの道楽は人間的次元に止まっています。ですから *Joyce-le-sinthome* について一気に語ったのです。

背景として、同時期、Judith Butler, Luce Irigaray らによるいわゆる *phallogocentrisme* の批判を受けての発言ということもあるが、この時点でファロスは特権的なシニフィアンなどとはいえなくなる。

### 3)ファロス、ファロスのジュイッサンス

ファロスと父親の名との強固な関係 S1-S2 が象徴的なものを支えていたのだが、既に1971年のセミナーにおいて、ファロスは〈父親〉-の-〈名〉から切り離される。ここでも名、固有名が関連してくる。

ご指摘したようにファロスは答えていませんでした。わたしが今から 声を大にして申し上げること糸口を見出すこととなるでしょう。それは *nom* (name あるいは *noun*) のことですが、固有名でなければ多くのことを明らかにすることはできません。*nom* とは呼びかけるものです。なにを呼びかけるのでしょうか。相手が話すことを呼びかけるのです。そこにファロスの特権があるのです。何故かという、懸命に呼びかけてもファルスはなにもしません。ただし、当時わたしが父親のメタフォールと呼んだものにこのファロスはその意味を与えますし、ヒステリー者はこのことでわれわれを導きます。父親のメタフォールを導入したのは、精神病の可能なす

すべての治療への前提となる問題についてです。わたしはこの父親のメタフォールを一般的なシェーマとして挿入しましたが、これはメタフォールについて言語学が言っているものと無意識の経験で圧縮として示されているものを接合しようとして抽出したものです。わたしは S/S 'xS' /s. と書きましたが、同様に「文字の執拗さ」でも書きました。意味を生むものとしてのメタフォールという面に特に依拠したのです。「Waverley の著者」がある意義 Sinn をもっているのは、「Waverley の著者」が一義的な意味 Bedeutung という他のものにとり変わるの、この一義的な意味をフレーゲが sir Walter Scott という名などで固定できると信じたからです。しかし結局、このアングルにおいてしか、わたしは父親のメタフォールに取り掛かることができませんでした。わたしがどこかで〈父親-の-名〉と書いたとすると、それはファロスのことであり[...]、それはまさにその時代では他に書きようがなかったからです。明らかなのは、ファロスはもちろんですが、ともかくも〈父親〉-の-〈名〉なのです。父親と名指されるもの、〈父親〉-の-〈名〉は、もしその名前がかれにとって構築物だとして、まさしくだれかが立ち上がり答えることになるのです。シュレーバーの精神病の発病で起きたことのアングル上では、シニフィアンとして母親の欲望に意味を与えることから当然のこととして〈父親-の-名〉を持ってきたわけです。しかし、例えばヒステリー者が必要があって、だれかの名を呼ぶとき、その人は喋るから呼ぶのです。

図1において JΦ は想像的なものの領野に属す鏡像に映る身体のゲシュタルトからはみ出た蛇足 appendice でありこれが現実のファロスの姿、つまり身体-外のジュイッサンスである。しかもボロメオの輪においてファロス(のジュイッサンス)はもはや中心(そこには a が置かれている)の位置を占めていない。

1975年1月21日の講義においては、父親の症状(ファロスがうまくいっていないこと/ファロスを振りかざしてもうまく行かないこと【パロールの論理の限界】)により、どのように子どもが、子ども自身の症状をこの父親の症状に同一化してゆくのかといった問い、ついで、ファロスについて、器官をもたないジュイッサンス、あるいはジュイッサンスをもたない器官ではないか、という問いが立てられる(この問いの答えは上述した【まとめ】に対する蛇足【appendice は虫垂でもある。つまり器官と呼べるとしても廃用性の器官

なのである】である)。このファロスをもつ男性側からすると、女性とは何か *qu'est-ce qu'une femme ?* という問いには、それは症状であると直ちに答えが出てくる。ファロスのジュイッサンスは〈他者〉のジュイッサンスに対しては不能であるからこれを症状と呼べるわけである。症状とは中断符であり、これは *langue pendante* という表現からも、「パロールではお手上げ」ということであり、これはファリックな機能の機能不全が因にあるからである。

*bandoulière*(1975年1月17日の講義)とはハドバッグ等のショルダー・ストラップのことであるが、この語は *bandage*(勃起)との語呂合わせである。*bandoulière* は肩に負担がかかるものであるが、*bandage* も同様であり、そのままであると苦しむ *affligé* こととなる。これが『不安』のセミネールでも出てくる *emgarras* であり、「ハンス少年」における不安が恐怖症(例えば馬に対する)へと移動する *se remue* のは、馬が父親の代理の象徴であるからでなく、*embarras* から馬のもつダイナミクス(例えば後ろ足だけで立つクールベット)への移行であり、この点でもハンス少年の現実の父親が優しいお父さんであったのに強引にエディプス的解釈をしていたフロイトの批判となっている。

1975年3月11日においては、「症状とは各自が無意識をどう享ずるか *jouit de l'inconscient* で変わってくるが、そもそも無意識とはそう享ずることを各自に決定づけている」といった答えが示される。

同日の講義において60年代 Jenny Aubry が入手し、観せてもらった動画について回想しながら、裸の子どもは鏡を前にして、必ず局部を隠すのだが、これは男の子においても女の子においてもファロスの省略、ファロスの不在を意味する。『*Les non-dupes errent*』においてポロメオの輪でいうとある現実的なものがファロスにおいて *ex-site* するのであるが、これがファロスのジュイッサンスなのだと言う。「羞恥」については *Seuil* 版 *Télévision* の表紙に描かれた女性の羞恥について *Les non-dupes errent* の1974年3月12日にラカンがコメントしている(拙稿、[http://blog.livedoor.jp/ogimoto\\_blog/archives/cat\\_40804.html?p=11](http://blog.livedoor.jp/ogimoto_blog/archives/cat_40804.html?p=11) 参照のこと)。

#### 4) *nommer* と *nomination*

Liliana Cazenave(“*Nomination*” in *Scilicet*, Décembre 2011)によると、R.S.I.におけるらかなは *le fait de nommer* と *la nomination* を区別しているとしているが、微妙である。Cazenave

が言うには、R.S.I.,1975年3月11日の講義でラカンが、ポロメオの輪でいうと、le nommerとは三つの輪の色分けをし、あるいはR,S,Iと名前をつけて区別する。しかしこれらの名前は単に象徴的な者との関わりをもつだけである(つまり差異性が示されるだけである)。この時点ではわれわれはまだsens(Sin)の次元にとまっている。これに対してla nominationにより、parlotte(一般的に-ot, -ot(t)eという接尾詞は価値の減弱、縮小を意味し、ラカンがこの語を用いるときは、パロールのネガティブな面を強調したい場合であり、「目減りした象徴的パロール」といった意味を含意しているように思われる。目減りとはメタフォールの要素を排したという意味であろう。ラカンの表現はしばしば反語的であるので注意を要する。話し言葉でも、direは結び目をつくるものとして後期ラカンにとっては、パロールより優位にあるものである)は現実的なものに自らを結ぶ。ここで作用するのは、言語とは異なった次元の者であり、それはパロールの行為acteの作用であり、指示(Bedeutung)への行為の作用である。指示とは現実的なものを目掛けているからである、と。筆者が着目するのは、同じ1975年3月11日の、筆者が問題の発言としている行である。

Miller J.-A. ( Miller J.-A., « L'orientation lacanienne. Pièces détachées », enseignement prononcé dans le cadre du département de psychanalyse de l'université Paris VIII, cours du 15 décembre 2004) はこう言っている。

セミナーR.S.I.においてラカンは「la parlotteは現実的なものに結ばれる」としているが、J.-A. Millerはこう説明している。すなわち「【名付けること】nommerは意味と現実的なものとのあいだの関係を築き確立する。その際、意味について〈他者〉へお伺いなど立てない。直接現実的なものに意味を生じさせるものを付け加えるのである」…「話し始めるや否や、ひとは神を信ずる(ものの名を与えるのは父親le pèreであるからである)…そして我々はこれらものに与えられた名を受け取る。受け取りながらこれらの名を信ずる」。

3月11日の講義においてラカンは、「わたしはle Nom-du-Pèreをその究極の機能fonction radicaleへと還元します。ものに名を与える機能へです」と言っている。同日の講義において、la nominationの多様性を、フレーゲのSinn, sensと(現実的なものを指示する)Bedeutung, référenceの違いから始めて区別する。

さらに、Le sinthomeの最初の講義において、ラカンは創世記の神の創造についての教訓譚を披露する。神がアダムの動物の種それぞれに名を与えるように仕向けるのだが、細



菌類については名付けていないことを強調する。ミレールが言うには「つまり、名をもたない、シニフィアンがない存在もあるのだが、それでもこれらの存在は現実界に属している。ラカンは予てからシニフィアンの創造的力 la puissance créationniste を自らの教えのなかで称揚してきた(…)、シニフィアンの創造力は ex nihilo「無から」のものである。教訓譚、つまりまず現実的なものがあり、ついでシニフィアンが錯綜をもたらし、ごたまぜの真 les embrouilles du vrai, ごたまぜの欲望 les embrouilles du désir, ごたまぜの禁止 embrouilles de l'interdit, ごたまぜのエディプス les embrouilleés de l'Œdipe…なぜならばシニフィアンはもともと現実的なものに突き当たるもの身体に突き当たるものであるから。

固有名は独自性 singularité を刻印する。固有名は共通の一国語を補完するのだがそのときジュイッサンスを刻印する。固有名は翻訳不能のものである。固有名はシニフィアンではなく文字の側に位置付けられる。ラカンは症状も同様に名をなすように仕向けられる。意味の場合(S1-S2)とは異なり、S1の行程は身体に突き当たり文字が記入され、こうして「言語の機能と現実的なものにおいて刻印をもたらすものとのあいだの結合部において固有名はジュイッサンスのひとつの名を与えるものとなる、と。

ジュネーヴ講演に従えば、人間(後にアダムを命名される男)が動物に対して行っていることは「猿まね」singerie であり、le nommer も la nomination も神が介在し(ラカンにとって、神は存在しないが ex-siste する)、文法的主語は神から人間、神から天使(Les Noms du Père において若きラカンは、イサクの燔祭についての創世記の記述について、テイヤール・ド・シャルダンに対して、天使の言葉にある「わたし」が途中で神の「わたし」にすり替わっている点について質問しているのだがド・シャルダンは途方にくれる)へと移動するのである。

1975年4月15日の講義においてラカンは、穴を、原則論に戻り、象徴的穴と再定義し、これがユダヤの律法における近親相姦の禁止との関係で不可侵の穴 trou inviolable であるとしてこう述べる、

象徴的なものについては、結び目において、他から区別されて、何某かとして現れてくるようにするために、わたしはこれを、エディプス・コンプレックスとは呼びません。エディプスはそれほど複雑 complexe ではないからです。〈父親〉-の-〈名〉と呼び換えます。〈父親〉-の-〈名〉を、当初の意味の〈名前〉-としての-〈父親〉だけでなく、〈名付けるもの〉-としての-〈父親

>le Père comme Nommantをも含ませるためです。この点ユダヤ人は親切ではありませんよね。かれ等はこれを<父親>であったと言ってきました。かれ等が呼ぶところの<父親>だと。想像を絶する穴のなかの一点にひとりの<父親>に押し込めたのです。「われは在るところのもの」、これは穴ではないですか。

そうしてです。そこから逆の動きが生じます。というのも、穴とは、わたしのささやかなシェーマを信じて頂くなら、渦巻く穴であり、というよりのみ込む穴でしょうか、あるときはそこから吐き出しもするのです。なにを吐き出すか。<名前>-としの-<父親>をです。

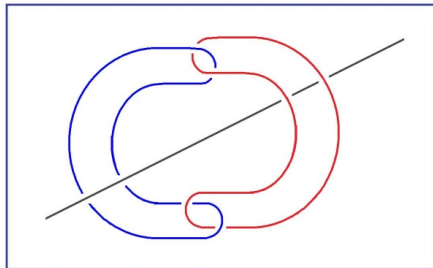
当然のこととして、この穴はフロイトにおける原-抑圧を連想させるものである。またそこから夢の臍、喪失した対象が導き出される。ポロメオの輪の中心部分はaが位置する。繰り返し述べるが、原-抑圧は事後の抑圧において働く逆備給によって説明されるものであるし、喪失した対象も、実際は喪失したものでなく、そもそも存在しないものである。抑圧には逆備給とは別に牽引力に基づく機制も作用する。「のみ込む」とはこれに符合するものである。「吐き出す」とは抑圧されたものの回帰に相当し、無意識の形成物である症状と関係してくる。後述するように、ラカンが<父親>-の-<名>も症状であると言っている。

続いて、la nomination は「唯一それが穴をつくるものとして確信がもてるものである」とされる。そしてこの穴をつくることにより、ポロメオの輪の結び目の数をその都度プラス1として加えてゆけば、これを無限大まで増やすことが可能であるが、差し当たり、カルテルの数を最小限としては4人とするとここでは言っている注)。象徴的なものの輪はそれに固有なものとして穴があり、この穴から出て行くものが ex-sistence であり、これにまともな consistancce が出来上がれば、三つ以上任意の数のポロメオの輪をつくることができることを繰り返し述べておく。但し、この結び目をつくる機能が nomination なのだとして、それが必ずしも象徴的なもの(の輪)にカップリングしなくてもよい。

注) 1964年にラカンがエコール・フロイディエンヌ・ドゥ・パリの枠内で少人数グループの有志の研究グループを創設しこれに Cartel という名称を与えた。構成人数は最低3人、最高5人であり、4人とはその中間になる。

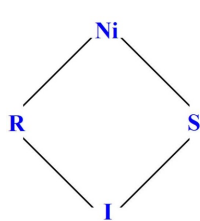
R.S.I.,1975年5月13日の講義において nomination の輪は R,S,I のそれぞれの輪とバ

ツクルをなして他の二つの輪でできるバックルとのあいだでポロメオの輪を形成する。バックルにおいてできる穴は偽の穴 faux trou であるが、二組の偽の穴どうして絡みめと同様の構造が出来上がる。

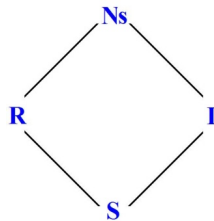


二つの輪のバックルその偽の穴と貫通する直線

ラカン



想像的名指し



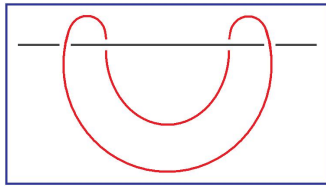
象徴的名指し

のように簡略化された図しか示していない。

Brigitte Lemérier が述べているように“La nomination dans le séminaire *R.S.I.* Le nom-du-père et le nommer-à”, <http://epsf.fr/wp-content/uploads/2016/01/Brigitte-Lemerer>

\_82.pdf)、想像的名指し nomination imaginaire は Les non-dupes error, 1974 年 3 月 19 日のセミナーでの nommer à (拙稿 [http://blog.livedoor.jp/ogimoto\\_blog/archives/cat\\_](http://blog.livedoor.jp/ogimoto_blog/archives/cat_)

41111.html?p=6 参照のこと)と関係する。想像的名指しの例として、ラカンは論理学者の業績を挙げる。かれ等は現実的なものを想像すると。想像的名指しが想像的なものを名指すのではない。身体における孔穴は真の穴(トーラスにおける穴)ではない。であるからかれ等の思考もこの偽の穴を通す直線にすぎない。これが想像的なものに属するのは思考の制止(図 4 参照のこと)だからなのであると。



偽の穴と直線

象徴的名指しにおいては、le Nom-du-Père と症状が乖離する。というのも、le Nom-du-Père(の輪)は想像的なもの(の輪)を名指し、症状が象徴的なもの、想像的なものそして現実的なもの(の輪)を結びつけるからである。

最後に一言付け加えておく。le Sinthome の輪(ミレール版 p.94 参照のこと)は、R.S.I.のこの最後の講義における三つの nominations の四つ輪のボロメオの輪とは構造が違う(再度、拙稿 <http://www.ogimoto.com/pdf/20171011-02.pdf> を参照のこと。Staferla の図は誤りがあり、ミレール版での修正は正しい)。

<http://www.ogimoto.com/pdf/20171011-02.pdf> 参照のこと。

還元 réduction に相反するものがラカンの言葉でいえば extrapolation(数学で用いられる「外挿」とはまったく関係がないものとみてよいであろう)であり、事実、ラカンがボロメオの輪を例えば次に示すように複雑に展開させている。さらに四つ目の輪を加えたボロメオの輪では「背中や首やその他身体各部からによきによきと結び目は生えて」いるわけであるので、もじどおり extrapolation となる。

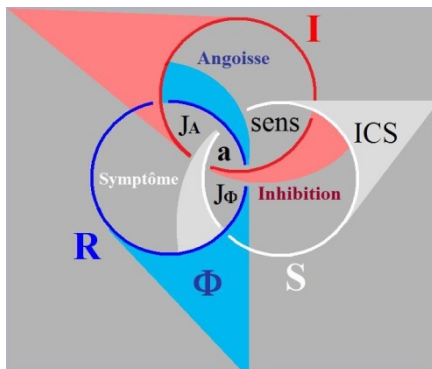


図 4.

このようにセミネール R.S.I.は réduction と extrapolation のあいだでラカンの地口を用いるならば Rimbateau(La Troisième 参照のこと。ランボアの「酔いどれ船」Le bateau ivreのごとく謂わば、千鳥足で蛇行しているのである)そのものである。冒頭に引用したラカンの言葉からすると、réduction は progrès であり、フロイトから(クラシカルなラカンを経て)後期ラカンへと向かう進歩なのであろうが、これを進歩とも呼べないと屈折した心境を映す言い回しである。いずれにしてもわれわれは、この extrapolation の部分について分析的ディスクールによって解釈しなくてはならない。この言葉が里程碑として示されているものと仮定してである。

## 2)メタフォール批判

1974年12月17日の講義におけるminimumとはなにに向けられたminimumなのか。このminimumの対極として示されるのが「メタフォールの隔たりの最大限」un maximum de l' écart de la métaphoreである。

(想像的なものが「形相的」という意味での実体 substance を想定していることについての批判に続き、ポロメオの輪が、想像的なものの特性である「まとまり」consistance とは別に、現実的なものにも三つの輪は純粋なまとまりとして結びついていることを踏まえ、批判は)メタフォールについてもまったく同様に言えます。このことは、昨年度のセミネールで意図した意味においてですが、「惰性運行」とはなににかという問題が立てられるのですが、これはメタフォールにおける「惰性運行」とはなににかという問題です。というのもわたしがお話しすること、それは象徴的なもの、話し言葉についてのみ言えることだからですが、わたしの話かにおいて、ポロメオの三つの輪かにまとまりがあることが現実的なものに根ざしているとするのは、こういう訳があつてのことです。つまり、「意味の隔たり」l' écart de sens という表現を用いますが、これが RIS 間、個々に三つある輪のあいだで、それぞれ固有なものとして当てはまるのです。「意味の隔たり」とは 最大限として一定の限定を想定されるものです。「意味の隔たり」に許される最大限とはなんでしょうか。これが、いま現在わたしが、かの言語学者(ヤコブソンのことである。象徴的なものが優位であった時期のラカン自身への自己批判により、この批判の矛先は必然的に自身の

恩師にも向けられてしかるべきであろうが、実際はラカンは、かれに対する批判は展開してはいない)に対してただただ問うてみたい質問なのです。

ラカンは明言していないが、フロイトの分析治療、解釈そして理論全般に通底しているものとは言語による分析であり、メタフォールの駆使である。象徴界を優位なものとしていた時期のラカンも同様であり、両者は共犯関係にあったといってもよいであろう。ポロメオの輪をラカンはエクリチュールであると定義している。パロールがメタフォールの意味を含むのに対して、エクリチュールは意味が捨象されている分、réductionが施されているものと解してよかろう。effet de fascination,さらにはjaculationといったもの(1975年2月11日の講義)は、パロールにおいてメタフォールが削ぎ落とされた効果effetである。奇妙なことであるが、ラカンは効果effetという表現を用いるとき、通常の意味における効果という意味においては「効果の出ない効果」であることが多い「意味の効果」effet de sens然りである。effet de sensとは「無-意味」non-sensないしhors-sensのことであり、sensの「外-立」ex-sistenceの効果なのである。

メタフォールの(自己)批判は、同時にle Nom-du-Père、シニフィアンとしてのファロスといった象徴的なものが優位であった時期の教えの全面的撤回となる。

ところでメタフォールというものは、どのようなものであったのか。以下はErik PorgeのL'erre de la métaphore(essai 21, Éditions érès, 2008, pp.17-44.)を紹介するために認めた拙稿(<http://www.ogimoto.com/pdf/20171002-01.pdf>)に修訂を施したものである。

『主体のメタフォール』と題された論文は『無意識における文字の執拗さ(instance は従来「審級」と訳されてきたが、この instance も他の多くの用例と同様、insistance の意である：筆者)の補遺として書かれたもので、『精神病のあらゆる可能な治療に対する前提的な問題について』と同時期のもの(1957年)であり、ここでのメタフォールの式：

$$\frac{S}{S'_1} \cdot \frac{S'_2}{x} \rightarrow S \left( \frac{I}{s''} \right)$$

も『精神病…』での式：

$$\frac{\text{Nom-du-Père}}{\text{Désir de la Mère}} \cdot \frac{\text{Désir de la Mère}}{\text{signifié au sujet}} \rightarrow \text{Nom-du-Père} \left( \frac{A}{\text{phallus}} \right)$$

を踏まえて読む必要がある。Porge は『主体…』からの引用に自らの説明をさし挟んでいる。メタフォールは「意味作用の効果であり、この意味作用の効果とは詩とか創作とかの類のものであり」、「連鎖をなしたシニフィアンのあるものから他のものへの置き換わりであり、この支え phore の機能は一切自然のものに定めに従ってはいない」。S' が相殺されることがメタフォールの成功の条件なのであるが、プレルマンも強調するように、「メタフォールは、言うならば、四項からなり、四つとも異質なものののだが、分割線によって三対一となり、これはシニフィエに対するシニフィアンの異質性への分割となる」(Écrits, p. 890)。置き換わりは連鎖のなかに余り un reste を残し、これが迂り、脱落する。メタフォールはメトニミーを伴う。《famillionnaire》の機知は、ラカンも指摘しているように、詩的想像とメトニミー的廃棄物からなるが、後者は抑圧され、それでいて光り輝くもの、といった二つの顔になる (Les formations de l'inconscient, Le Seuil, 1998, p.44)。〈父親〉の〈名〉le Nom-du-Père のメタフォールは象徴的なものが現実的なものと想像的なものに対して優位であった時期のラカンの教えである。父親のメタフォールの式はメタフォール(象徴的な作用の端的な例)と le Nom-du-Père とのあいだの特権的な絆を築くものであった。ヴィクトル・ユーゴーの『眠れるボアズ』の「かれの束の穂は惜しみもなく恨み深くもなく」の行における「束の穂」というシニフィアンにおいては、ファロスを含意する生殖力といった観念が Booz(これも zob の回文と看做される)に置き換わっている。先の三対一がメタフォールの論理を成り立たせていることから、メタフォールは単なる置き換わりに還元されるものではなく、つまり単なる比較ではなく同一性を生じさせるものなのである。ユーゴーの詩は、来たるべき父性をメタフォール化し、Booz にとっては遅れてやってくるもの(Booz が「排除された」もののように見えるとラカンは言っている)であり、さらに父性のメタフォールをメタフォールとしての父性へと結びつける。メタフォールは新たな意味を生じさせるものとしてそうなのである。この結びつきから、ファロ斯的シニフィアンは〈父親-の-名〉le Nom-du-Père に付随するものとなる。メタフォールの機能を獲得するに至った父親のシニフィアンはファロスが持つ性的な意味作用をも増補的に兼ね備えることとなる。逆から言えば、ファロスは象徴的な意味作用 signification を獲得するに至り、さらには意味 signification(Bedeutung)そのものになる。

#### 4. le Nom-du-Père と les Noms-du-Père

1963年11月20日に、たった一回だけ行われたセミナー *Les Noms du Père* (複数形、d ティレなし) は、*Espaces Lacan* の解説によると、当初は *Le nom du Père* と単数形、ティレなしのタイトルをラカンは用意していたようである。いつの時点でこれが複数形とて定着したのかは筆者は知らない。複数形の論拠としては、神に関する呼称が複数示されている (*Elohim*, *Chadan* あるいは *El Chadan*) ことを除いて、明確なものは見当たらない。出エジプト記の「燃える柴」における神の声とされる *ehie asher ehie* についてのアイグスティヌスの影響化での解釈が今でも残っている、フランス語で示すなら、*Je suis ce que je suis* (日本語では「われは在るとこのものものである」との訳となる) に対する、七十人訳聖書についてのラカンの評価からヘブライズムに対するヘレニズムの影響、父の名におけるトーテムの問題など、もしこのセミナーが続けられたら、「四概念」とはまったく違った展開を期待できたであろう。

R.S.I.の前年の *Les non-dupes errent* と *Les Noms-du-Père* と同音の地口によるタイトルのセミナーにおいても複数の父親の名については、まったく説明のない仄めかしを除いて、言及はない。但し、1974年3月19日のセミナーにおいて提出される *nommer à* の問題は R.S.I.の最後の講義(1975年5月13日)に登場する「想像的名指し」*nomination imaginaire* に関係してくるのであるが、これは後述する。

図3に立ち戻ると、現実界の輪が開かれ、一本の、無限に延びた直線へと展開されているのが示されている。この図と図4 (無限の直線の代わりに 明るい青色の帯が輪、つまり *consistance* から外に拡がっている) との関連を読み取ることが重要である。「開いて無限の直線に展開する」ことの意味は現実界の様相論理である不可能性、「書かれないことを止めない」*ne cesse pase de ne pas s' écrire* を示している。現実界そのものは無意味であり、無意味とはどこまで展開したところで意味が生じない、という様相である。

Daniel Loescher によれば (*La jouissance au fil de l' enseignement de Lacan, érès*, p.442)、*ex-sistence* は *exception*, *exclusion* をも意味するものであり、*sexuation* の式では  $\exists x \neg \Phi x$ 、原父の式に相当する、としている。ここからはいろいろな論議の展開が可能であろう。たとえばファロスのジュイッサンスからは〈他者〉のジュイッサンスへは到達「不可能性」が記されている、つまりファロスの法の否定は原父の「去勢をまぬかれて



いる」とする特権、これはファロスによって規定される象徴界という閉域からみればジュイッサンスなのであるが、そもそもジュイッサンスは現実界に属し、じじつ、女性の側からの pas toute によって、その効力は無に帰すこととなる。Loescher はこうも言っている。現実界は「意味」を expulsé されたもの、とするラカン(この年のセミナー、1975年3月11日の講義)に従うのなら、ファロスのジュイッサンスは「意味」において ex-siste する、であるからファロスのジュイッサンスは「意味」とは関係を持ち得ない、と。

ラカン自身の言葉でも以上のことは整合性を持つことがわかる。

すぐ目につくことですが、エクリチュールはそれ自体平面化へと向かわせるものがあります。そしてわたしが示唆すること、言い換えるとなにかが想定している、というより具現化している、たとえば象徴界は二次元空間でこう示していますが、つまりなにかが ex-siste すると、それは、エクリチュールにおいて想定されるのは、輪を無限に延びた直線に展開することによってしかなされないことからです(17/12>1974)。

そして図4については、

ここに  $J\phi$  としてファロスの享楽を位置付けることにします。現実界が ex-siste するものとしてであり、現実界の輪、現実界についての含意が施されているのでそう呼ぶのですが、これを展開すれば無限の直線になり、まともまり consistance から言うならば切り離されます。穴をなすものとしての現実界において享楽は ex-siste するのです。このことは精神分析的経験がもたらす事実なのです。

となる。ポロメオの輪は(特に平面化したもので見せられと)、これはどうしてもまともまり consistance を兼ね備えたものとして想像的に捉えるしかない。しかし ex-sistence により、ex-sistent するもの(le sens,  $J\phi$ ,  $J(A)$ ) は、現実的なものにおいて ex-sistent することとなり、そこではすべてが「意味」を失う。さらにフロイト批判として

フロイトは、いちいちその証左をここで挙げ連ねることはしませんが、ファロスの享楽を前にして、平伏したのでした。フロイトの精神分析的経験が発見したもの、それはこのファロスというもののジュイッサンスに解き難い結び目の機

能 la fonction nodale を与えてしまったことです。ファロスの享樂をめぐって、この現実界がどうなっているのか、これを基礎付けるのが分析の仕事です。

nodal(e)とは結び目 nœud の形容詞であるが、これは解かれることに抵抗したもの、と解される。結び目を解くには輪を切って線として(実際ラカンはそのようにしている)、開くことである。但しこの線が直線で無限のものとするのは擬似的にポロメオの輪の結び目性 nodalité を保ったままにしておく戦略なのであろう。じっさい輪がばらばらになれば ex-sister した 三日月形は消失してしまう。意味を失うとはこの消失を指してラカンは言っているのであろう。

ともあれラカンは、自身のポロメオの輪(三つ輪)ではなくフロイトの輪である四つ輪のポロメオの輪について話を展開してゆく。既に述べたように、四つ輪のポロメオの輪が登場する 1975 年 1 月 14 日に、この四つ目の輪に与えられた「心的現実」、「エディプス・コンプレックス」といった表現を、本稿の冒頭に掲げた 1975 年 2 月 11 日の当日の講義の末尾から少し遡った講義の途中で、一旦「宗教的現実」la réalité religieuse に置き換えて、「こうしてこの機能、この夢のような機能により、フロイトは象徴的なもの、想像的なものそして現実的なものを結ぼうと思いを馳せ始めたのです」と述べている。

1975 年 3 月 11 日の講義でラカンは、仕切り直しするかのように次のように述べる。

…R.S.I.、今年タイトルとしてそう書きました。R.S.I.はどれも文字で、文字そのものです。これらは等価性が前提となっています。これらをイニシャルとして、もしアール、エス、イーと言うとどうなるのでしょうか。あるいはレエール、サンボリック、イマジネールと言うと意味が生じます。そしてこの意味についての問題が、相も変わらず、今年の課題なのです。そこに意味が生じますが、意味に固有なものとは、そこで何某かを名付け nomme、「もの」les choses という漠然としたものにディマンション注)を生じせしめ、この「もの」は三つの領野のひとつである現実的なものにのみ根ざしており、ここから意味の現出と呼ぶことができる何某かなのです。

ここで新たに「名付ける」nommer という今までとは異なった次元が加わる。

注)拙稿 Sexuation の式 - Le savoir du psychanalyste の 1972 年 6 月 1 日のアントウルティアンを中心に - I.R.S., 9/10, pp.298-331 参照のこと(但し、本セミナーに基づけば、エクス - シスタンスを通じて 意味が無 - 意味になる点がこの稿では欠けている)。Vincent Clavurier によると mansion は「住み家」の語意との関連でハイデッガーの「人間は言語の住み家」と関連している点での記述もあるが、英語 mansion はフランス語 manoir に関連していることが述べられている。Manoir は mano-art とも表記でき、ポロメオの輪の手芸によって表わされる、デカルト的空間とは違ったトポロジー的空間の 3 次元での話 dit の効果を踏まえているとされる(«Réel, symbolique, imaginaire : du repère au nœud», Vincent Clavurier, ESSAIM, 2010/2, No25, pp.83-96)。nommer を「名付ける」と訳したが、ラカンは nommer と言ったり donner un nom と言っている箇所もあるが、これらは同一の意味をもつものと判じられる。la nomination は「名指し」と訳したが、nommer およびその名詞化 le nommer と la nomination は区別すべきと Liliana Cazenave(“Nomination” par Liliana Cazenave, in Schilicet 2012, 本稿は現在 URL 上で読むことはできない)は述べているが、必ずしもそうとも思えない。その訳は、この 3 月 11 日のラカンの問題となる発言にある。

この行に至るまでのラカンの言葉を少し遡って追って行くことにする。

まず nommer についてこう説明がある。

「それらを名付けて」«Les nomme»とわたしは言いました。わたしがしたことはまだ証明には至っていないのです。ポロメオの輪「示すこと」monstration もそれほどできていないのと似たり寄ったりで証明もまだまだです。この結び目で「示すこと」ができているものについては証明することを試みてきました。証明とは分析的ディスクールに仕立てることで、「示すこと」も証明も骨が折れます。

Monstration は「現実」に結び目を作ったり、解いたりすることで、それを披露することであるが、Les non-dupes errent では monstration さえできれば良いと言っていたが、本セミナーでは専らポロメオの輪に執心していて、その上現実的なものを優位にしているの、この行はやや奇異に聞こえるが、後に象徴的なものの一部と現実的なものの結びつきが重要であることが明かされるので、ここでは démonstration とは現実的なものについ

て象徴的なものの領野で行うこととのみ理解しておく。

ついでラカンはフロイトにおける父親とはなにかといった問題に踏み込む。ラカン曰く、フロイトにとって父親は *le Nom-du-Père* でしかないと言う。『トーテムとタブー』での現父は残忍で暴君的イメージで捉えられているが、息子たちに殺害された後は法を具現する象徴的父親となる。ラカンからすれば、フロイトは想像的父親も現実的父親も象徴的父親が中軸にあり、想像的父親に関して言えばそれは生前の父親であり、あるいは原-父であり、それが想像的であることが理解できず、死が分水嶺となっていて、体内化による同一化等複雑な *complexe* 機制による説明が加わり象徴的父親へと結びつく。「原」Ur は神話的であり事後的に過去に想定されるものになっている。原-光景、原-抑圧しかりである。例えば原-抑圧についてのラプランシュとポンタリスの『精神分析用語辞典』の記述を見てみよう。「原抑圧は無意識の初期形成物の起源をなしてはいるが、その規制は無意識の側からの備給によっては説明されえない。それはまた前意識-意識系からの備給の撤回により生じるのではなく、専ら逆備給から生じる。【原抑圧における持続的な消費をあらわしているのは逆備給であるが、それはまた原抑圧の持続性を保証している。逆備給は原抑圧の唯一の規制である。本来の抑圧(事後の抑圧)にはそれに前意識備給の撤回がつけ加わる】」〔Freud (S). 『無意識について』1915. G.W., X, 280 ; S.E., XIV, 181 ; 仏, 120 ; 著作集, VI, 98 ; 選集, IV, 212-3. (『精神分析辞典, ラプランシュ/ポンタリス, 村上仁監訳, みすず書房, 1977)〕。フロイトは Ur が付く術語に関して、時間軸における前後関係と論理的前後関係とのあいだで混同、勘違に気づいていないか、意識的論点先取があるかどちらかである。ラカンがしばしば口にする「前提とは想像的な領野の産物である」という定式はここにおいても符合している。『否定』についての論文を父親に当てはめるならば、フロイトにおける父親は存在判断と帰属判断とのあいだでの混同、混乱がある。エディプス・コンプレックスというからにはコンプレックスは複合であるのであるが、フロイトにおける父親はほぼラカンの *le Nom-du-Père* (単数系)という表現で置き換えることができる。もちろんフロイトの著作を読んでいると、*der Vater* 以外に *ein Vater*, *mein Vater*(フロイト自身の父親であったり、分析主体が語った言葉が直接話法で示されているかれ/かの女の父親)その他、*dein Vater*, *Ihr Vater*, *sein Vater*, *ihr Vater*, *unser Vater*, *euer Vater*, *Ihr Vater*, *unsere Väter*, *eure Väter*, *Ihre Väter* 等々の語に遭遇するが、かれ等は *le père symbolique* の現身として、あるいはそれが含意的なものであったり、そうでなくともリファレンスとして示されている。因みにフロイトにおける現実の父親は、隠蔽記憶によってアクセントがずらされていることだけが示され、フロイト自身の現実の父親についての分析はほとんどなされていないと言ってよい。

十歳か十二歳かの少年だった頃、父はわたしを散歩に連れて行って、道すがらわたしに向かってかれの人生観をぼつぼつ語り聞かせた。かれはある時、昔はどんなに世のなかが住みにくかったかということの一例を話した。「己の青年時代のことだが、いい着物をきて、新しい毛皮の帽子をかぶって土曜日に町を散歩していたのだ。するとキリスト教徒がひとり向こうからやってきて、いきなり己のぼうしをぬかるみのなかへ in dem Kot 叩き落とした。そしてこういうのだ、『ユダヤ人、歩道を歩くな』」「お父さんはそれでどうしたの？」すると父は平然と答えた、「己か。己は車道に降りて、帽子を捨てたさ」これはどうも少年のてをひいて歩いて行くこの頑丈なちちおやにふさわしくなかった(フロイト著作集2『夢判断』165 ページ、高橋義孝訳、人文書院【Sigm. Freud, 《Traumdeutung》, Gesammelte Werke II/III, pp.202-203, S. Fischer Verlag】)。

In dem Kot はフロイトの各国語の翻訳において邦訳と同じような隠喩で訳されてるが、筆者には、まず直訳が浮かぶ。しかしこれは時代考証、当時のフライベルグの街について、道路事情、下水事情、渠についての考証が必要であろう。「舗道」は「歩道」と書き換えた。

フロイトの分析は、ハンニバルとハスドルバルの例についても、その行き着くべきは、エディプス・コンプレックスに基づく超自我、自我理想への想致でしかない。『日常生活の精神病理学』、X、「思い違い」(フロイト著作集4、187-188 ページ、懸田克躬訳、人文書院【Sigm. Freud, 《Zur Psychopathologie des Alltagslebens》, X. “Irrtümer”, Gesammelte WerkeIV, pp.243-245】)においてもこれが繰り返される。かれには「現実の父親」が見えていない。「ハンス少年」の症例においても同様である。いくつかのフロイト分析の結果は、反動形成の強化でしかない。

ラカンにとって un père はまさしく現実の父親注である。現実的なものがより重視されるようになり<父親> (-)の(-)<名>注のうち le Nom-du-Père と表記されているものについて、次第に(自己)批判色が強まる。

1975年1月21日の講義においてラカンは現実の父親/ある父親について「父親 un père は愛が認められる場合にのみ尊敬も認められる」、としながらこう付け加える。「愛と言われているもの」そして「尊敬と言われているもの」について、「皆さんは耳を疑うでしょうが」

と断った上で、「père-version 的に向けられ père-versement orienté」となる。更に、「父親は母親を欲望の原因となる対象(a)として」となり、これが愛と言えるかどうかである。対象はすべて部分対象である。女体の部分、あるいは女体全体であってもそれを部分として欲望が働くのであれば、これは性的欲望に他ならないし、部分対象への欲望ということであれば、これはフェティッシュ的欲望となる。… ou pire での愛の定式「僕が君に与えるものを拒んで欲しい、なぜならばそれはそうではないのだから」Je te demande de me refuser ce que je t'offre, à ce que ça n'est pas ça であるとすると。現実の父親の妻(母親)に対する欲望とはこの定式には当てはまらず、この欲望を愛であるとする主張はかれの妻からの承認が不可欠である。ラカンはこの行に続いて、子どもたちに対しても、例外的にうまくいっているケースでも、せいぜい、禁圧を加えながら、現実に介入し(つまり子どもたちの世話をし)、半分神さま mi Dieu のような存在を保つこともできる、と述べている。父親の機能 fonction にとって père-version はその唯一の保証となってしまうし、これも症状の関数 fonction であることが示される。

症状についての外延は後期、晩年のラカンにおいて大幅な拡がりを見る。究極的には一般化したボロメオの輪 nœud borroméen généralisé とともに一般化した症状 symptôme généralisé が理論付けられるのであるが、この問題は本稿の枠には収まらないので、ここでは後述することとなるファロスのジュイッサンスと〈他者〉のジュイッサンス jouissance de l'Autre(この de は目的格的属格の意味で使われている。つまり〈他者〉【の身体】を jouir することである)の関係について、手短かに述べることにする。

第一に、ファロスには欠陥があり、〈他者〉の身体を jouir する能力など持ち合わせていない(「性的関係はない」ことの元凶である)。それゆえ〈他者〉のジュイッサンスは不可能なのである。であるから女性 une femme はすべての男性にとって症状となる(一方で、le Sinthome、1976年2月17日の講義において、このことと相関するような行が現れる。

… 性的等価性 équivalence 注1)がないところに sinthome があるのです、つまり関係が生ずるのです… 無-関係は等価性に属するものです。等価性がない限りにおいて関係は構成されるのです。つまり性的関係と関係がないものと並存するのです。ただし、関係がある場合、sinthome がある限りにおいて、つまり既に述べたことですが、sinthome から他の性が支えられるのです… le sinthome とはまさにわたしが属していない性、女性 une femme なのです。女性 une femme がすべての男性にとって un sinthome であるのは、

至極当然のことですが、他の名を、男性としては女性 une femme に見いだす必要があるからです。le sinthome が非-等価性によって特徴付けられているのですから。こう言えましょう。男性 l'homme は女性 une femme にとって、あらゆる意味において、un sinthome よりひどい責め苦となっており、こう言ってもいいでしょう、災禍 un ravage 注2)となっているのです。

注1) 等価性については拙稿 <http://www.ogimoto.com/pdf/20171011-02.pdf> を参照のこと

注2) フランス語 ravage は ravir と同根であり、ravir は俗ラテン語 rapire に由来する。英語では rape となり「サビニの女たちの略奪」を英語では The rape of the Sabine Women と表記される。rape はこの場合「強姦」の意味をもたない。フランス語では通常 Enlèvement des Sabines と呼ばれる。ravir からは当然 ravissement が派生してくる。ravisement の語意は enlèvement と同義であるが、神秘思想において、この語は一種の脱-自 extase であるとされ、魂は神によって捕らえられることであり、神は力づくで魂を奪うのであり、extase を経験する者はこれに抵抗することすらできない。この後者の意味が和らげられ、現在用いられる ravissement の語義となるのだが、略奪、誘拐といった語義も含意していることを念頭にマルグリッド・デュラスの『ロル・V・スターンの歓喜』は読まれるべきであろう。ラカンに即して言えば、ravage はやはり ravissement をも含意して捉えるべきで、心的に強力な作用を及ぼす、母親-娘の関係(フロイト的図式でいえば、娘は母親に対して、ペニスをつけて自分を産んでくれなかったことへのルサンチマンの強さから、しばしばフランス語圏ではこの心的強度を ravage にて表す。ラカンにおいてはしばしば、女性の側からの ravage は究極のケースでは恋愛妄想 érotomanie に結びつく。恋愛妄想のケースでは「名-無し」Sans-Nom(v. les Écrits, p.826)は自らに名を与える se faire un nom、それも例外的女性 La femme として名をなしていることが妄想の中核にある。

1963年11月20日の Les Noms du Père が、その当時において、後期ラカンに対してどれほどの射程をもっていたかは計り知れないが、ボロメオの輪を導入してから、この〈名〉を複数形にしたことについて、かれは、先見の明があったとして、誇らしげに語る。セミナー R.S.I.(1975年3月11日)において、Les Noms-du-Père(複数、ティレ付き)注)についてはラカンは、それは象徴的なもの、想像的なものそして現実的なものであり、辿々しく語る。筆者が問題となる発言としている箇所である。

Les Noms-du-Père、つまり最初の名(Noms)で、言わしていただくと、先程「意味」という語に込めた重みからすると、この Les Noms-du-Père が最初の名で何某かを名付けるものとして、〈父〉が、神が名付けるのですが、動物それぞれに、名をです。聖書にそう書かれています。驚くべき存在で聖書には〈父〉と呼ばれる存在です。人間の想像の第一歩では〈父〉とは神のことです。神が、どうでもいいものではなく動物それぞれに名を与えるために駆り出されるのです。

筆者は再度確認したが、日本語訳でもフランス語訳でも英語訳でも、動物に名を与えた者は後にアダムと呼ばれる人間になっている。

יֵט וַיִּצָר יְהוָה אֱלֹהִים מִן הָאָדָמָה, כָּל חַיֵּת הַשָּׂדֶה וְאֵת כָּל עוֹף הַשָּׁמַיִם, וַיָּבֵא אֶל הָאָדָם, לְרֹאוֹת מֶה יִקְרָא לוֹ; וְכָל אֲשֶׁר יִקְרָא לוֹ הָאָדָם נִפְשׁ חַיָּה, הוּא שְׁמוֹ.

2-19. L'Éternel-Dieu avait formé de matière terrestre tous les animaux des champs et tous les oiseaux du ciel. Il les amena devant l'homme pour qu'il avisât à les nommer; et telle chaque espèce animée serait nommée par l'homme, tel serait son nom.

2-19. そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。20 それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。

単なるラカンのラプシュスなのであろうか、ことさら辿々しく語っていることからなにか底意があったのか。ラカニアンの中なかでもこの点に言及しているものは皆無である。ラカン自身としてば、1975年10月4日のジュネーヴ講演において、O. フルールヌワの精神病における排除 forclusion についての質問に対して

〈父親〉-の-〈名〉の排除 forclusion。それは別の次元の問題です。〈父親〉-の-〈名〉だけが問題なのではなく、〈名〉-の-〈父親〉も含意しているのです。つまり名付ける父親です。このことは創世記にはっきり描かれています。猿まね



よろしく、神はアダムに動物たちに名を与えるように告げます。二段階あるようにことは進展していくのです。神は動物たちの名について知を想定しているものです。なにせかれが動物たちを創造したのですから。ですから神は人間を試したことになる。人間は猿まねができることを見抜いていたのです。この点について、ジョイスのなかで-Jacques Auber はわたしの心中を察してくれていると思いますよ。男の方は、鷺鳥のことをガチョと発音することになったのです。男性は情けないものに位置付けられるのです。わたしは多くの人がショックを受けることをよく口にする性質(たち)でしょうが、言語を発明したのはむしろ女性ではないかと。創世記にそのことを読み取れます。蛇にかの女たちは話しかけます。つまりファロスにです。かの女たちはファロスが自分たちにとってヘテロだからその分話しかけるのです。

わたしの夢虚言かもしれませんが、ともかくこう問うことができるでしょう。ひとりの女性がいかにしてそれを発明したか。かの女はそれに関心があったからと言えましょう。常識に反して、ファロス中心主義は女性 la femme の最良の保証です。それ以外なにもありませんから。聖母マリアは蛇の頭を踏みつけています。つまり蛇に支えられているのです。どの画家によるものもステレオタイプなのです。そんな軽口叩いて、と仰るかもしれませんが、ジョイスも同様な馬鹿げたことを連想させることを書いていますから。

ジョイスはかれ独特の筆致で女性たちとの関係を描いています。かれは、人間に特技があるとしたら、そえはただひとつ、先人たちが言えなかったことを言うことができる点であることを示そうとしました。だとしても結局、それも繰り言です。それは症状です。わたしの道楽は人間的次元に止まっています。ですから Joyce-le-sinthome について一気に語ったのです。

背景として、同時期、Judith Butler, Luce Irigaray らによるいわゆる phallogocentrisme の批判を受けての発言ということもあるが、この時点でファロスは特権的なシニフィアンなどとはいえなくなる。

### 3)ファロス、ファロスのジュイッサンス

ファロスと父親の名との強固な関係 S1-S2 が象徴的なものを支えていたのだが、既に1971年のセミナーにおいて、ファロスは<父親>-の-<名>から切り離される。ここでも名、固有名が関連してくる。

ご指摘したようにファロスは答えていませんでした。わたしが今から 声を大にして申し上げることに糸口を見出すこととなるでしょう。それは nom (name あるいは noun) のことですが、固有名でなければ多くのことを明らかにすることはできません。nom とは呼びかけるものです。なにを呼びかけるのでしょうか。相手が話すことを呼びかけるのです。そこにファロスの特権があるのです。何故かという、懸命に呼びかけてもファルスはなんにも言いません。ただし、当時わたしが父親のメタフォールと呼んだものにこのファロスはその意味を与えますし、ヒステリー者はこのことでわれわれを導きます。父親のメタフォールを導入したのは、精神病の可能なすべての治療への前提となる問題についてです。わたしはこの父親のメタフォールを一般的なシェーマとして挿入しましたが、これはメタフォールについて言語学が言っているものと無意識の経験で圧縮として示されているものを接合しようとして抽出したものです。わたしは S/S 'xS' /s. と書きましたが、同様に「文字の執拗さ」でも書きました。意味を生むものとしてのメタフォールという面に特に依拠したのです。「Waverley の著者」がある意義 Sinn をもっているのは、「Waverley の著者」が一義的な意味 Bedeutung という他のものにとり変わるのは、この一義的な意味をフレーゲが sir Walter Scott という名などで固定できると信じたからです。しかし結局、このアングルにおいてしか、わたしは父親のメタフォールに取り掛かることができませんでした。わたしがどこかで〈父親-の-名〉と書いたとすると、それはファロスのことであり[...]、それはまさにその時代では他に書きようがなかったからです。明らかなのは、ファロスはもちろんですが、ともかくも〈父親〉-の-〈名〉なのです。父親と名指されるもの、〈父親〉-の-〈名〉は、もしその名前がかれにとって構築物だとして、まさしくだれかが立ち上がり答えることになるのです。シュレーバーの精神病の発病で起きたことのアングル上では、シニフィアンとして母親の欲望に意味を与えることから当然のこととして〈父親-の-名〉を持ってきたわけです。しかし、例えばヒステリー者が必要があって、だれかの名を呼ぶとき、その人は喋るから呼ぶのです。

図1において JΦ は想像的なものの領野に属す鏡像に映る身体のゲシュタルトからはみ出た蛇足 appendice でありこれが現実のファロスの姿、つまり身体-外のジュイッサン

スである。しかもボロメオの輪においてファロス(のジュイッサンス)はもはや中心(そこには a が置かれている)の位置を占めていない。

1975年1月21日の講義においては、父親の症状(ファロスがうまくいっていないこと/ファロスを振りかざしてもうまく行かないこと【パロールの論理の限界】)により、どのように子どもが、子ども自身の症状をこの父親の症状に同一化してゆくのかといった問い、ついで、ファロスについて、器官をもたないジュイッサンス、あるいはジュイッサンスをもたない器官ではないか、という問いが立てられる(この問いの答えは上述した【まとめ】に対する蛇足【appendice は虫垂でもある。つまり器官と呼べるとしても廃用性の器官なのである】である)。このファロスをもつ男性側からすると、女性とは何か *qu'est-ce qu'une femme?* という問いには、それは症状であると直ちに答えが出てくる。ファロスのジュイッサンスは〈他者〉のジュイッサンスに対しては不能であるからこれを症状と呼べるわけである。症状とは中断符であり、これは *langue pendante* という表現からも、「パロールではお手上げ」ということであり、これはファリックな機能の機能不全が因にあるからである。

*bandoulière*(1975年1月17日の講義)とはハドバッグ等のショルダー・ストラップのことであるが、この語は *bandage*(勃起)との語呂合わせである。*bandoulière* は肩に負担がかかるものであるが、*bandage* も同様であり、そのままであると苦しむ *affligé* こととなる。これが『不安』のセミネールでも出てくる *emgarras* であり、「ハンス少年」における不安が恐怖症(例えば馬に対する)へと移動する *se remue* のは、馬が父親の代理の象徴であるからでなく、*embarras* から馬のもつダイナミクス(例えば後ろ足だけで立つクールベット)への移行であり、この点でもハンス少年の現実の父親が優しいお父さんであったのに強引にエディプス的解釈をしていたフロイトの批判となっている。

1975年3月11日においては、「症状とは各自が無意識をどう享ずるか *jouit de l'inconscient* で変わってくるが、そもそも無意識とはそう享ずることを各自に決定づけている」といった答えが示される。

同日の講義において60年代 Jenny Aubry が入手し、観せてもらった動画について回想しながら、裸の子どもは鏡を前にして、必ず局部を隠すのだが、これは男の子においても女の子においてもファロスの省略、ファロスの不在を意味する。『*Les non-dupes errent*』においてボロメオの輪でいうとある現実的なものがファロスにおいて *ex-site* するのであるが、これがファロスのジュイッサンスなのだと言う。「羞恥」については *Seuil*

版 Télévision の表紙に描かれた女性の羞恥について Les non-dupes errent の 1974 年 3 月 12 日にラカンはコメントしている(拙稿、[http://blog.livedoor.jp/ogimoto\\_blog/archives/cat\\_40804.html?p=11](http://blog.livedoor.jp/ogimoto_blog/archives/cat_40804.html?p=11) 参照のこと)。

#### 4) nommer と nomination

Liliana Cazenave(“Nomination” in Scilicet, Décembre 2011, PP.242-245 )によると、R.S.I. におけるラカンは le fait de nommer と la nomination を区別しているとしているが、微妙である。Cazenave が言うには、R.S.I.,1975 年 3 月 11 日の講義でラカンは、ポロメオの輪でいうと、le nommer とは三つの輪の色分けをし、あるいは R,S,I と名前をつけて区別する。しかしこれらの名前は単に象徴的な者との関わりをもつだけである(つまり差異性が示されるだけである)。この時点ではわれわれはまだ sens(Sin)の次元にとまっている。これに対して la nomination により、parlotte(一般的に -ot, -ot(t)e という接尾詞は価値の減弱、縮小を意味し、ラカがこの語を用いるときは、パロールのネガティブな面を強調したい場合であり、「目減りした象徴的パロール」といった意味を含意しているように思われる。目減りとはメタフォール的な要素を排したという意味であろう。ラカンの表現はしばしば反語的であるので注意を要する。話し言葉でも、dire は結び目をつくるものとして後期ラカンにとっては、パロールより優位にあるものである)は現実的ななにかに自らを結ぶ。ここで作用するのは、言語とは異なった次元の者であり、それはパロールの行為 acte の作用であり、指示(Bedeutung)への行為の作用である。指示とは現実的なものを目掛けているからである、と。

筆者が着目するのは、同じ1975年3月11日の、筆者が問題の発言としている行である。

Miller J.-A. ( Miller J.-A., « L'orientation lacanienne. Pièces détachées », enseignement prononcé dans le cadre du département de psychanalyse de l'université Paris VIII, cours du 15 décembre 2004)

はこう言っている。

セミナーR.S.I.においてラカンは「la parlotteは現実的なものに結ばれる」としているが、J.-A. Millerはこう説明している。すなわち「【名付けること】nommerは意味と現実的なものとのあいだの関係を築き確立する。その際、意味について〈他者〉へお伺いなど立てない。直接現実的なものに意味を生じさせるものを付け加えるのである」…「話し始める

や否や、ひとは神を信ずる(ものの名を与えるのは父親le pèreであるからである)…そして我々はこれらものに与えられた名を受け取る。受け取りながらこれらの名を信ずる」。

3月11日の講義においてラカンは、「わたしはle Nom-du-Pèreをその究極の機能 fonction radicaleへと還元します。ものに名を与える機能へです」と言っている。同日の講義において、la nominationの多様性を、フレーゲのSinn, sensと(現実的なものを指示する)Bedeutung, référenceの違いから始めて区別する。

さらに、Le sinthome の最初の講義において、ラカンは創世記の神の創造についての教訓譚を披露する。神がアダムが動物の種それぞれに名を与えるように仕向けるのだが、細菌類については名付けていないことを強調する。ミレールが言うには「つまり、名をもたない、シニフィアンがない存在もあるのだが、それでもこれらの存在は現実界に属している。ラカンは予てからシニフィアンの創造的力 la puissance créationniste を自らの教えのなかで称揚してきた(…)、シニフィアンの創造力は ex nihilo「無から」のものである。教訓譚、つまりまず現実的なものがあり、ついでシニフィアンが錯綜をもたらし、ごたまぜの真 les embrouilles du vrai, ごたまぜの欲望 les embrouilles du désir, ごたまぜの禁止 embrouilles de l'interdit, ごたまぜのエディプス les embrouilleés de l'Œdipe…なぜならばシニフィアンはもともと現実的なものに突き当たるもの身体に突き当たるものであるから。

固有名は独自性singularitéを刻印する。固有名は共通の一国語を補完するのだがそのときジュイッサンスを刻印する。固有名は翻訳不能のものである。固有名はシニフィアンではなく文字の側に位置付けられる。ラカンは症状も同様に名をなすように仕向けられる。意味の場合(S1-S2)とは異なり、S1の行程は身体に突き当たり文字が記入され、こうして「言語の機能と現実的なものにおいて刻印をもたらすものとのあいだの結合部において固有名はジュイッサンスのひとつの名を与えるものとなる、と。

ジュネーヴ講演に従えば、人間(後にアダムを命名される男)が動物に対して行っていることは「猿まね」singerie であり、le nommer も la nomination も神が介在し(ラカンにとって、神は存在しないが ex-siste する)、文法的主語は神から人間、神から天使(Les Noms du Père において若きラカンは、イサクの燔祭についての創世記の記述について、テイヤール・ド・シャルダンに対して、天使の言葉にある「わたし」が途中で神の「わたし」にすり替わっている点について質問しているのだがド・シャルダンは途方にくれる)へと移動するのである。

1975年4月15日の講義においてラカンは、穴を、原則論に戻り、象徴的穴と再定義し、これがユダヤの律法における近親相姦の禁止との関係で不可侵の穴 *trou inviolable* であるとしてこう述べる、

象徴的なものについては、結び目において、他から区別されて、何某かとして現れてくるようにするために、わたしはこれを、エディプス・コンプレックスとは呼びません。エディプスはそれほど複雑 *complexe* ではないからです。〈父親〉-の-〈名〉と呼び換えます。〈父親〉-の-〈名〉を、当初の意味の〈名前〉-としての-〈父親〉だけでなく、〈名付けるもの〉-としての-〈父親〉 *le Père comme Nommant* をも含ませるためです。この点ユダヤ人は親切ではありませんよね。かれ等はこれを〈父親〉であったと言ってきました。かれ等が呼ぶところの〈父親〉だと。想像を絶する穴のなかの一点にひとりの〈父親〉に押し込めたのです。「われは在るところのもの」、これは穴ではないですか。

そうしてです。そこから逆の動きが生じます。というのも、穴とは、わたしのささやかなシェーマを信じて頂くなら、渦巻く穴であり、というよりのみ込む穴でしょうか、あるときはそこから吐き出しもするのです。なにを吐き出すか。〈名前〉-としての-〈父親〉をです。

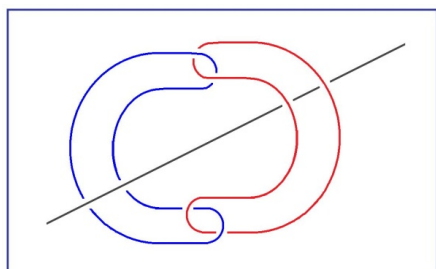
当然のこととして、この穴はフロイトにおける原-抑圧を連想させるものである。またそこから夢の臍、喪失した対象が導き出される。ボロメオの輪の中心部分は *a* が位置する。繰り返し述べるが、原-抑圧は事後の抑圧において働く逆備給によって説明されるものであるし、喪失した対象も、実際は喪失したものでなく、そもそも存在しないものである。抑圧には逆備給とは別に牽引力に基づく機制も作用する。「のみ込む」とはこれに符合するものである。「吐き出す」とは抑圧されたものの回帰に相当し、無意識の形成物である症状と関係してくる。後述するように、ラカンは〈父親〉-の-〈名〉も症状であると言っている。

続いて、*la nomination* は「唯一それが穴をつくるものとして確信がもてるものである」とされる。そしてこの穴をつくることにより、ボロメオの輪の結び目の数をその都度プラス1として加えてゆけば、これを無限大まで増やすことが可能であるが、差し当たり、カルテルの数を最小限としては4人とするとここでは言っている注)。象徴的なものの輪はそ

れに固有なものとして穴があり、この穴から出て行くものが ex-sistence であり、これに  
 まとまり consistancce が出来上がれば、三つ以上任意の数のポロメオの輪をつくること  
 ができることを繰り返し述べておく。但し、この結び目をつくる機能が nomination なのだ  
 として、それが必ずしも象徴的なもの(の輪)にカップリングしなくてもよい。

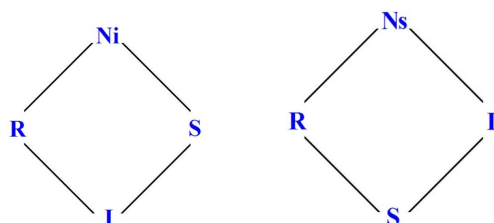
注) 1964 年にラカンがエコール・フロイディエンヌ・ドゥ・パリの枠内で少人数グループの  
 有志の研究グループを創設しこれに Cartel という名称を与えた。構成人数は最低3人、  
 最高5人であり、4人とはその中間になる。

R.S.I.,1975 年 5 月 13 日の講義において nomination の輪は R,S,I のそれぞれの輪とバ  
 ックルをなして他の二つの輪でできるバックルとのあいだでポロメオの輪を形成する。  
 バックルにおいてできる穴は偽の穴 faux trou であるが、二組の偽の穴どうしで絡みめ  
 と同様の構造が出来上がる。



二つの輪のバックルその偽の穴と貫通する直線

ラカンは



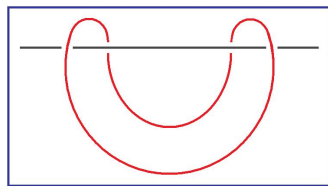
想像的名指し

象徴的名指し

のように簡略化された図しか示していない。

Brigitte Lemérier が述べているように(“La nomination dans le séminaire R.S.I. Le nom-du-père  
 et le nommer-à”, <http://epsf.fr/wp-content/uploads/2016/01/Brigitte-Lemerer>

\_82.pdf)、想像的名指し nomination imaginaire は Les non-dupes error, 1974 年 3 月 19 日のセミナーでの nommer à (拙稿 [http://blog.livedoor.jp/ogimoto\\_blog/archives/cat\\_41111.html?p=6](http://blog.livedoor.jp/ogimoto_blog/archives/cat_41111.html?p=6) 参照のこと)と関係する。想像的名指しの例として、ラカンが論理学者の業績を挙げる。かれ等は現実的なものを想像すると。想像的名指しが想像的なものを名指すのではない。身体における孔穴は真の穴(トーラスにおける穴)ではない。であるからかれ等の思考もこの偽の穴を通す直線にすぎない。これが想像的なものに属するのは思考の制止(図 4 参照のこと)だからなのであると。



偽の穴と直線

象徴的名指しにおいては、le Nom-du-Père と症状が乖離する。というのも、le Nom-du-Père(の輪)は想像的なもの(の輪)を名指し、症状が象徴的なもの、想像的なものそして現実的なもの(の輪)を結びつけるからである。

最後に一言付け加えておく。le Sinthome の輪(ミレール版 p.94 参照のこと)は、R.S.I.のこの最後の講義における三つの nominations の四つ輪のポロメオの輪とは構造が違う(再度、拙稿 <http://www.ogimoto.com/pdf/20171011-02.pdf> を参照のこと。Staferla の図は誤りがあり、ミレール版での修正は正しい)。